

猫尾城址

福岡県八女郡黒木町大字北木屋所在の中世山城の調査

黒木町文化財調査報告第1集

1991

黒木町教育委員会

猫尾城址

福岡県八女郡黒木町大字北木屋所在の中世山城の調査

黒木町文化財調査報告第1集

序

猫尾城が1186年（文治2年）に築城されて、1584年（天正12年）に落城するまで約388年間、黒木城主によって守られた。その後、現在まで400年の間、町民の憩いの城山として親しまれてきました。

しかし、中世山城跡として名高い評価を受け、昭和58年3月19日付で県の文化財に指定されました。

町民の方々が、猫尾城の復原に熱い希望が寄せられたので、復原するためには山城の解明が必要であります。

そこで、国・県の補助を受け、昭和63年度から平成元年度にかけて本丸、平成2年度には二の丸・土塁・水郭の発掘調査を行いました。

この報告書が、猫尾城に対する理解を深め、山城の研究・文化財の保護及び愛護思想の普及のために活用されれば幸いです。

なお、猫尾城の発掘調査に際しましては、県文化課・九州歴史資料館・専門調査の各先生方のご指導・ご助言を賜り、また、地元の方々の多大なご協力を受けました。ここに心から熱くお礼申し上げます。今後は、この報告書にもとづきまして、保護と整備につとめていきたいと思っておりますので、猫尾城に対する理解とご協力をお願いいたします。

平成3年3月30日

黒木町教育委員会 教育長 横田 了

例 言

- 1 本書は、館の復原整備計画に伴い昭和63年度から平成2年度にかけて実施した福岡県八女郡黒木町大字北木屋、笠原に所在する中世山城である猫尾城の発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、黒木町教育委員会が事業主体となり、福岡県教育南筑後教育事務所が担当した。事業経費については、黒木町が国庫補助を受けた。
- 3 遺跡での実測図は、福岡県教育庁指導第二部文化課課長技術補佐の宮小路賀宏、福岡県文化財保護指導委員の佐々木四十臣、黒木町教育委員会の原信也・中村文廣、南筑後教育事務所の佐々木隆彦が作成した。図面の整図ならびに遺物の実測は、関久江、豊福弥生、平田春美、江上佳子の協力を得た。
- 4 現場での写真は、佐々木（隆）が撮影し、遺物写真は、九州歴史資料館の石丸洋技術主査の指導のもとに須原悦子、矢野明美にお願いした。
- 5 遺物整理は、福岡県教育庁指導第二部文化課の整理指導員である岩瀬正信の指導助言を得て九州歴史資料館で行った。
- 6 猫尾城の航空測量（1/500）は、朝日航洋株式会社に委託した。
- 7 本書の執筆は、Ⅱを佐々木四十臣氏、Ⅴを和田重雄氏、佐々木（四）氏にお願いし、その他は佐々木（隆）が分担した。
- 8 題字は黒木町教育委員会・教育長、横田 了による。
- 9 本書の編集は、佐々木（隆）が担当した。

本文目次

	頁
I はじめに	1
II 遺跡の地理・歴史的環境	3
III 発掘調査の記録	
1) 地形測量	5
2) 遺構と遺物	
(1) 本丸址の調査	7
(a) 城普請	8
(b) 館 址	12
(c) 門 址	15
(d) 櫓 址	15
(e) 土 塁	18
(f) 曲 輪	23
(g) 出土遺物	27
(2) 堀切りの調査	39
(3) 二の丸址の調査	41
(a) 城普請	42
(b) 館 址	43
(c) 櫓 址	44
(d) 出土遺物	46
(4) 縦堀・土塁の調査	48
(5) 水郭の調査	49
(a) 井戸址	49
(b) 出土遺物	52
IV おわりに	53
V 文献からみた猫尾城(抄)	57
VI 附 編	
(a) 野田山出土の古銭	65
(b) 高牟礼城址地形測量	66

図版目次

- 図版 1 (1) 猫尾城、高車礼城俯瞰(峯切畑山頂より)
(2) 猫尾城と高車礼城遠景(矢部川より)
- 図版 2 (1) 本丸西側石垣(南から)
(2) 本丸東側石垣(三の丸から)
- 図版 3 (1) 三の丸全景(本丸から)
(2) I区第1、2、13トレンチ(北から)
- 図版 4 (1) I区第1トレンチ盛土状態
(2) 第20トレンチ岩盤整形状態
- 図版 5 (1) 本丸頂部石垣と石段(西から)
(2) 本丸頂部の石垣(西から)
- 図版 6 (1) 第1トレンチ礎石出土状態
(2) 本丸I区全景(北から)
- 図版 7 (1) 本丸II区全景(北西から)
(2) 本丸II区控え石組(北から)
- 図版 8 (1) 本丸II区櫓台址(西から)
(2) 本丸II区石祠跡と石段(西から)
- 図版 9 (1) 本丸II区と土塁土層断面
(2) 本丸III区と南北トレンチ(南から)
- 図版 10 (1) 本丸III区南北トレンチ遺物出土状態
(2) 第21トレンチ石組み
- 図版 11 (1) 第21トレンチ土層断面
(2) 大手門址の礎石
- 図版 12 (1) 第4、7トレンチと櫓台址(東から)
(2) 第7トレンチの櫓と土塁の接合部分
- 図版 13 (1) 第22トレンチの櫓台の石組(西から)
(2) 第5トレンチの土塁の石組(東から)
- 図版 14 (1) 第6トレンチの土塁石組(東から)
(2) 第8トレンチの土塁石組(東から)
- 図版 15 (1) 第9、10トレンチの土塁石組と礎石(南から)
(2) 本丸石垣蹴上がり部分
- 図版 16 (1) 第11トレンチ全景(南から)

- (2) 第12トレンチ掘手門東側土塁(西から)
- 図版 17 (1) 第14トレンチ土塁石組(東から)
(2) 第15トレンチ本丸南側石垣(北から)
- 図版 18 (1) 第15トレンチ石垣と盛土状態
(2) 第16トレンチ土塁全景(北から)
- 図版 19 (1) 第16トレンチ土塁盛土状態
(2) 南曲輪部敷石遺構(北から)
- 図版 20 (1) 第19トレンチ曲輪部(東から)
(2) 第19トレンチ土層断面
- 図版 21 (1) 第29トレンチ土層断面(大手門通路)
(2) 第30トレンチ(大手門通路)と礎石投棄状態
- 図版 22 (1) 第24トレンチ(堀切)全景(西から)
(2) 第25トレンチ(堀切)全景(西から)
- 図版 23 (1) 二の丸Ⅰ区東西トレンチ土層断面
(2) 二の丸第1トレンチ盛土状態
- 図版 24 (1) 二の丸第1トレンチ土層断面
(2) 二の丸Ⅰ区全景(西から)
- 図版 25 (1) 二の丸Ⅰ区全景(東から)
(2) 二の丸櫓址礎石(根石)出土状態
- 図版 26 (1) 縦堀・土塁全景(北から)
(2) 縦堀・土塁土層断面
- 図版 27 (1) 井戸址調査区全景(南西から)
(2) 井戸址(南から)
- 図版 28 本丸第1トレンチ出土遺物
- 図版 29 本丸第1、10、11、12、16、19トレンチ出土遺物
- 図版 30 本丸第20、28、30、大手門、Ⅱ区出土遺物
- 図版 31 本丸Ⅲ区南北トレンチ出土遺物
- 図版 32 本丸Ⅲ区南北トレンチ出土遺物
- 図版 33 本丸Ⅲ区南北トレンチ、二の丸出土遺物
- 図版 34 二の丸、野田山出土遺物
- 図版 35 野田山出土古銭

挿 図 目 次

頁

第1図	猫尾城周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2
第2図	本丸地形図 (1/400)	折り込み
第3図	堀切・三の丸付近地形図 (1/400)	折り込み
第4図	I区第1トレンチ、Ⅲ区南北トレンチ土層図 (1/60)	9
第5図	第20トレンチ土層図 (1/60)	10
第6図	館址石垣実測図 (1/60)	11
第7図	館址石段実測図 (1/60)	11
第8図	第1トレンチ遺構実測図 (1/60)	12
第9図	Ⅱ区遺構実測図 (1/60)	折り込み
第10図	第21トレンチ遺構、土層実測図 (1/60)	14
第11図	門址礎石実測図 (1/60)	15
第12図	第4、7トレンチ遺構、土層実測図 (1/60)	16
第13図	第22トレンチ遺構、土層実測図 (1/60)	17
第14図	第5トレンチ遺構実測図 (1/60)	18
第15図	第6トレンチ遺構実測図 (1/60)	19
第16図	第8トレンチ遺構実測図 (1/60)	19
第17図	第9、10トレンチ遺構実測図 (1/60)	20
第18図	第12、14トレンチ遺構実測図 (1/60)	21
第19図	第15トレンチ遺構実測図 (1/60)	22
第20図	第16トレンチ遺構実測図 (1/60)	23
第21図	第18トレンチ遺構実測図 (1/60)	24
第22図	第19トレンチ遺構実測図 (1/60)	25
第23図	第29、30トレンチ遺構実測図 (1/60)	26
第24図	I区第1トレンチ出土土器実測図 (1/3)	29
第25図	Ⅱ区出土土器実測図 (1/3)	30
第26図	Ⅱ区異構址土瓦実測図 (1/3)	30
第27図	Ⅲ区南北トレンチ出土土器実測図その1 (1/3)	32
第28図	Ⅲ区南北トレンチ出土土器実測図その2 (1/3)	33
第29図	Ⅲ区南北トレンチ出土土製品実測図 (1/2)	34
第30図	各トレンチ出土土器実測図 (1/3)	35

第31図	各トレンチ出土土製品、石製品、鉄器実測図 (1/2)	37
第32図	堀切付近地形図 (1/400)	40
第33図	第25トレンチ土層実測図 (1/60)	41
第34図	二の丸、馬場付近地形図 (1/400)	折り込み
第35図	I区東西トレンチ、西斜面トレンチ土層実測図 (1/60)	43
第36図	二の丸礎石実測図 (1/40)	44
第37図	二の丸遺構配置図 (1/80)	折り込み
第38図	I区遺構実測図 (1/60)	45
第39図	二の丸出土遺物 (1/3)	46
第40図	二の丸南西堀堀、土塁周辺地形図 (1/1,000)	48
第41図	堀堀、土塁土層実測図 (1/60)	48
第42図	井戸址周辺地形図 (1/400)	49
第43図	井戸址と配石遺構実測図 (1/60)	50
第44図	井戸址実測図 (1/40)	51
第45図	井戸址北側土層実測図 (1/60)	52
第46図	井戸址周辺出土遺物 (1/3)	52
第47図	野田山出土古銭拓影 (実大)	65
第48図	野田山出土陶器実測図 (1/4)	66
第49図	高車礼城地形測量 (1/600)	67

付 図

付 図 1 猫尾城航空測量図 (1/1,000)

I はじめに

猫尾城は昭和55年度に町の文化財に指定され、昭和57年には県文化課及び県文化財保護審議委員の現地踏査が実施された。これをもとに、翌年の昭和58年には県指定史跡となり、その後、黒木町が公園化し管理運営を行っていた。しかし、近年地域興しが盛んに提唱され始め、黒木町も町の活性化を計るため、猫尾城本丸の居館の復原計画が提案された。これにもとづいて、計画案は町議会に上程され実施に移すことが決議された。この間、館の復原に関しては県指定史跡であることから、周辺の環境と調和した復原整備が条件となるため、昭和62年、町議会に対して文化課記念物係の磯村技術主査がその旨を説明し、実態を把握しその調査結果に基づいた復原案を提唱した。この経緯を踏まえて、福岡県教育庁指導第二部文化課及び福岡県教育庁南筑後教育事務所と黒木町教育委員会とで協議し、国庫補助を得て当初単年度事業として実施することとなった。

発掘調査は、昭和63年度の9月に実施した。しかし、調査を遂行する過程で、単年度事業では当初の目的である館の検出はおろか山城の実態も把握できないと判断し、黒木町教育委員会と協議した結果、昭和63年度から平成2年度の三ヶ年事業として実施に移すこととなった。

発掘調査の期間 第1次調査 昭和63年9月19日～11月10日

第2次調査 平成1年8月1日～10月4日

第3次調査 平成2年9月17日～10月31日

調査関係者は次のとおりである。

調査総括 黒木町教育委員会

教 育 長 横 田 了

社会教育係長 八田忠宏

社会教育課長 樋口正尚（前任）

同 指導主事 原 信也（文化担当）

同 水本健一

用 務 員 中村文廣

同 係長 古賀政信（前任）

調査担当 福岡県教育庁指導第二部文化課 課長技術補佐 宮小路賀宏（前任）

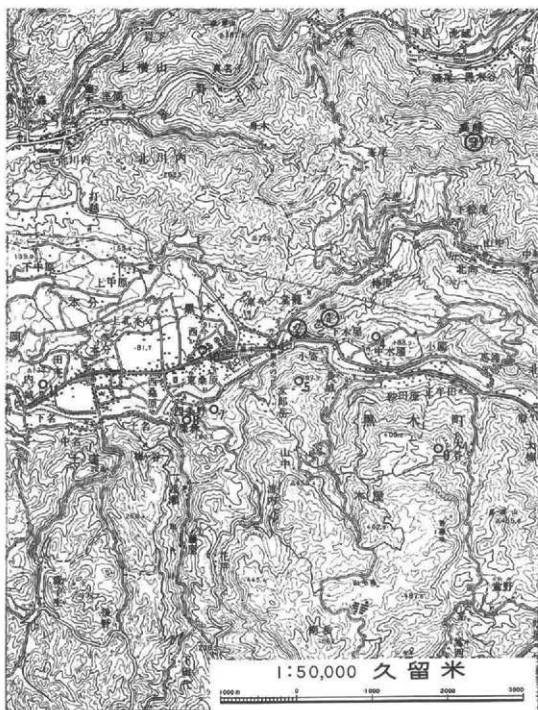
同 技術主査 磯村幸男

福岡県教育庁南筑後教育事務所 技術主査 川述昭人（前任）

同 技術主査 佐々木隆彦（調査担当）

福岡県教育庁指導第二部文化課 文化財専門員 日高正幸

このほか、黒木町文化財専門委員会の和田重雄会長より指導、助言ならびに猫尾城に関する資料の提供を受けた。また、発掘調査で県文化財保護指導委員の佐々木四十臣氏をはじめ、地元の方々の献身的な作業のもとに調査が無事終了したことに感謝の意を表します。



1. 猫尾城址 2. 黒木氏居館址 3. 高牟礼城址 4. 野田山古銭出土地 5. 峯切田
6. 高牟礼城址 7. 高城址 8. 梨木山障址 9. 黒木大塚 10. 津江神社大埴
11. 大念塚遺跡

第1图 猫尾城周辺遺跡分布図 (1/50,000)

II 位置と歴史的環境

猫尾城址は、福岡県八女郡黒木町に所在する。

黒木町は福岡県の東南部にあって八女地区の東部に位置し、西は八女市と立花町に隣接し、東は矢部村に隣接して大分県へと通じている。南は熊本県と境をなし、北は上陽町と星野村に接している。福岡・大分県境の釈迦岳（標高1231m）・御前岳（標高1211m）の山腹に源を発する矢部川が、町の東端に位置する県営日向神ダムを経て、途中で剣持川・笠原川・田代川といった各支流を合しつつ、町を東より西へ流れている。

猫尾城址は、矢部川本流と笠原川とが合流する地点にあって、通称は城山と呼び習わされている。戦略的に見てまさしく奥八女を押さえる要の位置を占めている。

城址は本丸で標高240.1mを測り、矢部川を挟んで南の峯切畑（標高297.9m）と向き合っている。また、背後には高牟礼城址である高峰（標高567.2m）や大山くうやま（標高599m）が聳えている。

文政8年（1825）に久留米藩士・「村上量敏」によって著された『山土産』に、「この山、尾（尾根のこと）短くて、鉢を伏せたながごとし」と記されているが、矢部川の川原から眺めた山容が的確に表現されている。猫尾城の猫尾の語源は、尾根の根つこの小山に通じるとの説もあり、けだしその説は妥当ではないだろうか。

猫尾城の歴史は、徳太寺実定の依頼によって山門郡瀬高荘を管理するために、仁安2年（1167）源助能が大隅国（現鹿児島県）大根占（おおねじめ）より黒木に移って来た時に始まる。以来この猫尾城は黒木氏代々の拠城として、天正12年（1584）の落城までの417年という長期にわたって、いつの時代にも八女の要衝としての位置づけに揺るぎなかった。

この猫尾城を本城として近隣には、高牟礼城をはじめ高城・南城・南華城・向城・大岩空堀城その他の山城があったことが、記録の中に見ることができる。

ところで、黒木町には猫尾城址（県指定）以外にも指定文化財は数多くある。猫尾城址南麓には黒木の大藤（国指定）があり、伝えによれば後征西將軍良成親王のお手植えといい、推定樹齢は600年とされている。いま一つの国指定文化財に五條家文書17巻と八幡大菩薩旗があり、南北朝時代を研究する上で不可欠史料となっている。

県指定文化財としては、雲長寺の彼岸桜（枯死）、津江神社の大樟、田代の風流、地庵人形芝居、霊巖寺の奇岩、木造聖観音立像、荒谷のカエデ、空室のカツラなど数多い。

この他に26件を町指定文化財として指定しているが、いずれも貴重な文化遺産であり、ここにいちいち取り上げて紹介できないことは残念と云わなければならない。

また黒木町は、中世以降と考えられるが阿蘇修験山伏の峰入り出立地でもあった。同町の本分の北背の低丘陵上に大念塚という場所があり、今なお数基の塔婆が現存するが、以前に剝落

した石片から年号の文保とも読める刻字なども採集されたことがある。この大念塚が資料にいう山伏の修験痕跡と指摘されている。

さらにはこの大念塚周辺で古窯跡も確認されているが、本格的な発掘調査がなされていないことから、今後の調査に期待しなければならない。

黒木町から上陽町へと越える中原峠の一帯では石器類が採集されており、縄文時代の遺跡が所在することが知られている。ちなみに猫尾城と向かい合う峯切畑の頂上付近からも石鐮類が採集されている。いずれも本格的な調査が行われたものではなく詳細は分からない。

ところで猫城址の発掘調査と関連して高牟礼城址の地形測量も実施したが、こちらは遺構の残存状況は良いものの、その地形の険しさと云ったら類稀であって、黒木側（南）と星野側（北）の両斜面とも急峻そのものであるといつてよい。

歴史的に見ても、猫尾城（本城）は落ちても高牟礼城が難攻を誇ったというのもうなずける思いがする。

和田重雄編著「郷土の文化財」（改訂・第一集）	黒木町教育委員会	1988
橋本徳太郎著「西征將軍宮、御在所・御墓所考證」	日の出書院	1942
村田正志・黒川高明校訂「五條家文書」	続群書類従完成会	1975
村上量敏著「山土産」		1825

III 発掘調査の記録

猫尾城址は、本丸址、二の丸址、三の丸址、馬場、土塁、空堀、などが遺存している。これらの遺構は、復原整備の基本資料の確認という観点から全面調査の方策はとれず、部分調査（トレンチ調査）方式で実施し、遺構を確認した時点で拡張することとした。遺構の確認に先立って、まず現地測量（1/200）及び調査終了後航空測量（1/500）を実施した。初年度は本丸を中心に測量と調査を実施し、次年度は本丸と三の丸間の空堀及び三の丸址と二の丸、馬場などの測量ならびに本丸と空堀の調査を実施した。三年度は二の丸の調査と標高 160m 付近に存在していると伝えられている井戸址（通称殿様の井戸）の周辺の測量及び調査を行った。

1) 地形測量

(a) 本丸址

本丸址は通称猫山の山頂部（標高240m）に占地する。現在本丸址は、城山公園として整備されており樹木の植栽がなされている。正面には英彦山権現を祭る堂宇があり、昭和3年の御大典記念時に再建されたことが堂宇の棟札から判明した。堂宇の左側には昭和59年に建立された猫尾城戦没将士霊塔があり、その傍には不揃いの五輪塔が移築されている。南西隅には東屋が立てられ、その北側には九州電力株式会社の鉄塔で覆いをうけていた。この鉄塔は九州電力株式会社との事前協議のもとに調査前に撤去した。

「筑後将士軍談」によると本丸の規模は「南北30間、東西15間。麓より本丸までは5町38間云々…」とある。測量調査の結果、腰曲輪部を含めると南・北85m、石垣までの規模で65mを測り、東・西のそれは54mと42mの規模を有すが、三の丸に面する東側は曲輪を巡らしておらず急斜面をなし堀切に接している。現況での曲輪は東側を除くすべてに巡らしており、南側の堀切と曲輪の境に構築した土塁（天正12年〈1584〉大友軍が攻め入る直前に構築したと考えられる。）によって曲輪は途切れている。北側に巡る曲輪の状況から推考すると、曲輪は16世紀に掘られた堀切で故意に破壊された可能性も考えられる。さらに、曲輪の北側斜面には三段の低い石垣が組まれており、その内の一段は曲輪に通じていることから築城当時の構築物と考えることができる。

数ある中世山城の中で本丸に石垣を巡らす事例は珍しく、類稀な例と言える。調査前の状況では大部分の石垣は露呈していたものの、細部については不明確な箇所もみ受けられた。石垣

は周辺で産する片岩質の石材を平積みにしており、石垣全体を俯瞰すると、所どころに屈折した箇所がある。この築城方法が何を意味するかは断言できないが、築城時における地形的制約に寄る結果とも看取できる。石垣のうちで西側の大手口側と東側は大振りの石材を使用して堅固な石垣を構築している。特に大手門の左袖に位置する櫓址（西櫓）及び東北の櫓址（長櫓）と東南の櫓址（翼櫓）の基礎部分の石垣は一段と大振りの石材を使用している。

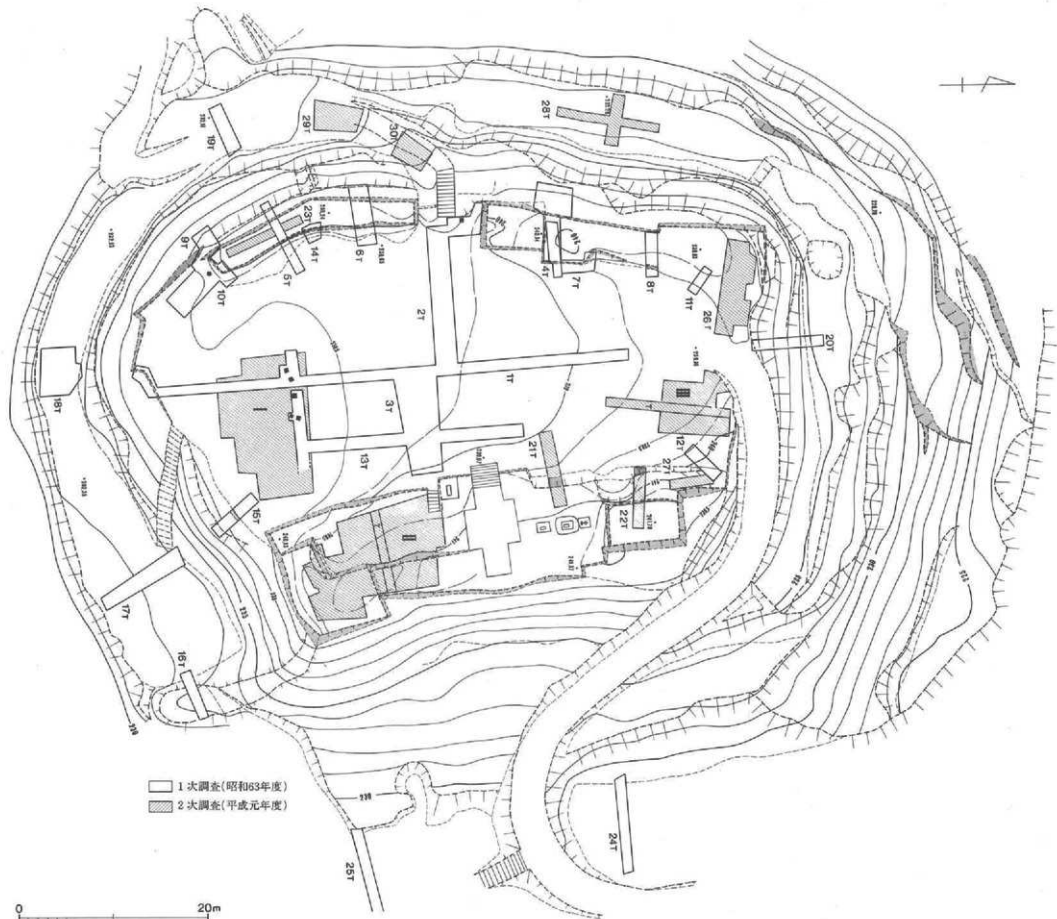
これに対して、南・北の石垣は絹雲母片岩を使用した簡略な構築方法をとっており土留め状の機能を有した石垣である。北側の石垣に関しては、昭和60年頃の管理道路建設時に一部石垣が破壊されたらしく、発掘調査中に猫尾城に詳しい和田重雄氏及び地元の古老から聴き取り調査を行ったが、管理道路建設の際に二列に敷き詰められた板石が発見されたい。このことから本丸の北側に搦手門が設けられていたと推測され、現在の管理道路は当時の三の丸から搦手門に通じる古道の部分と考えられる。また、昭和初期頃には黒木駐在所の主催で本丸址広場で運動会が開催されており、その後も小型重機による整地がなされたい。その際に館の礎石が除去されたらしく、調査前の踏査時点で周辺に川原石の礎石が散在していた。和田氏が踏査していた昭和55年当時三基の櫓台址には板石の礎石が遺存していたらしく、その後取り払われたことが判明した。大手門の正面には、高さ2m、長さ42m、幅4m～11mの石垣を築き一段高所を形成している。本丸の平坦部にこの様な高所を設ける例は稀である。

また、大手門の両側には幅2.5m～3.5m、総延長約42m～43m（北側はベンチの設置及び垣樹のため未確認）の土塁を構築しており、搦手門の東側にも土塁の痕跡が残っていることから搦手門側にも土塁が巡っていたと考えられる。南側については後述する。

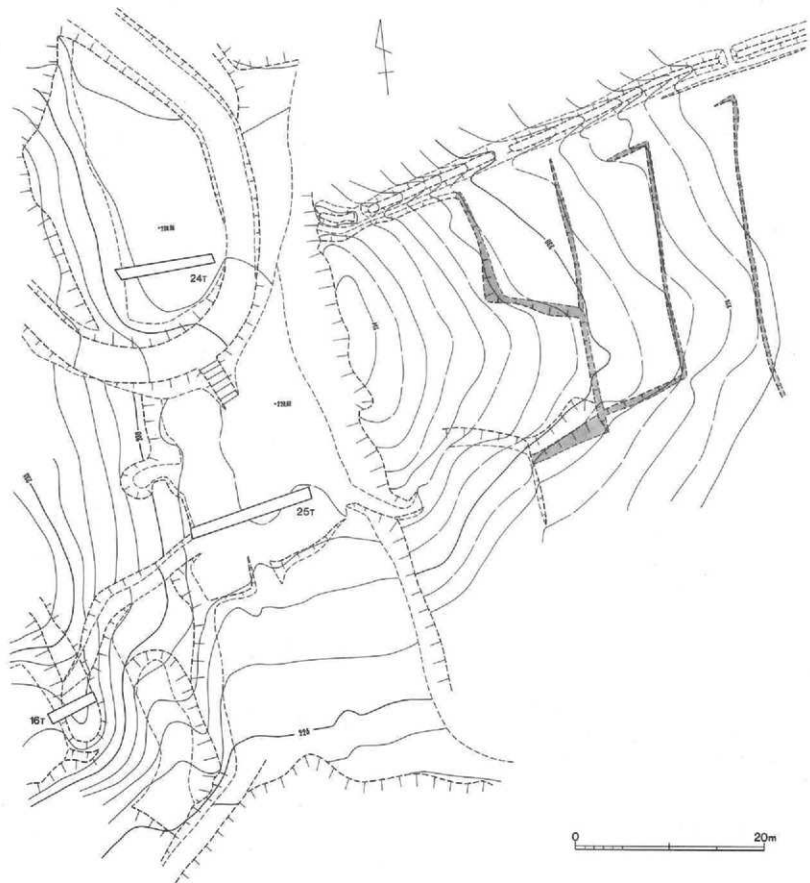
（b）二の丸址

二の丸は、猫山の西端で本丸の西側約195mにあり、標高202mに位置する。本丸との比高差は38mを測り、現況では昭和3年に建立された薬師如来を安置する堂宇が中央にある。俯瞰地形では略三角形を呈し、地層は雲母片岩の岩盤が露呈しており堂宇建設時に若干の削平が考えられる。「筑後将士軍談、巻之第四十六」によると二の丸の規模は「長さ15間、横15間、本丸より58間下にあり云々…」と記載されている。さらに、本丸との間に50間の馬場が存在したことも記録されている。

測量結果をみると、館跡が存在したと想定される平坦部の規模は南・北軸で28m（約15間）、南辺12m（約7間）、北辺は東側に位置する馬場と繋っており不明確であるが、約27m（15間）前後を計る。「筑後将士軍談」及び「久留米領古城之覚書」には縦、横とも15間（約27m）の正方形との記録があり、現況地形とは一致しない。この資料が正しければ、東側の低部平坦面が後世に地形変更されたことになる。



第2図 本丸地形図 (1/400)



第3図 堀切・三の丸付近地形図 (1/400)

さらに、西側には幅4mの曲輪状のテラス(平坦部との比高差3.7m)を設けているが、周囲の管理道路建設により削平を受け旧地形を保っていない。北側の標高195.5m付近には帯曲輪状のテラスを確認した。おそらく築城当時の付属施設と考えられるが、竹林のため測量調査は不可能であった。

(c) 三の丸址

三の丸は、現在私有地で個人が管理しており、本丸の東側に位置する。本丸との間には天正年間に掘削した堀切が走る。現状での三の丸は旧地形が残っているが、頂部は東側に沿って緩斜面をなし平坦部は形成されていないように見てとれる。最頂部は標高234mを測り、東側の緩面には一段乃至二段の石垣を鍵状に四段ほど構築している。

しかし、測量調査で見るとかぎり館址の存在は確認されておらず礎石も見当たらない。四段の石垣間は僅かに平坦部をなすことから、当該石垣は後世の掘作のために築かれたとも考えられるが、「筑後将士軍談」によると「三の丸は本丸の45間(約80m)下にあり云々…」と記されており、現況での45間下には石垣が認められ当該石垣が猫尾城当時の所産とも看取できる。また、石垣と接する北側には総延長約90mの低い土塁状の高まりがあり、本遺構が猫尾城当時の構築か否かは明らかではない。

2) 遺構と遺物

(1) 本丸址の調査

本丸址の調査は、猫尾城址の館址を復原整備する目的から、トレンチ調査方式を採用した。第一次調査では、まず平坦部の中央に南北トレンチを設定し、礎石の遺存状態及び築城方法を確認することに主眼を置くと同時に、土塁及び石垣、腰曲輪の部分に1～20のトレンチを設定した。

また、第二次調査では第一次調査で検出した礎石の周辺を拡張し館址の確認に重点を置いたため、面的調査に切り替えⅠ区からⅢ区の調査区を設定し、礎石の確認と北側の築城方法を調査した。さらに、守閣の遺存したと推測される高所の北側に21、22トレンチ、さらに土塁の横列痕を確認する目的で23、26、27トレンチを設定し、大手門に通じる曲輪部分及び西側の曲輪に28～30のトレンチを設定した。以下順を追って説明する。

(a) 城普請

第1トレンチ(図版4-(1)、第3図)

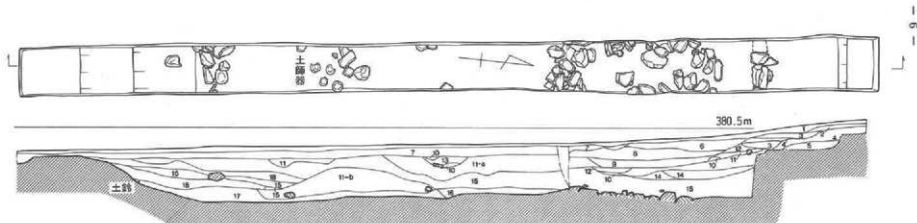
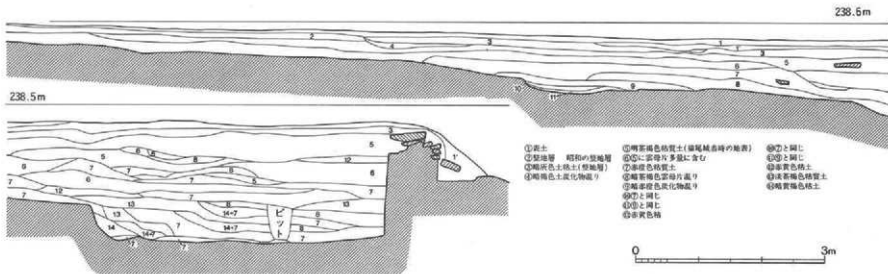
本丸の南北方向に幅1.2m、総延長51mを設定した。調査の結果、本丸の中央部分はすでに雲母片岩の岩盤が露頭しており築城時に既に削平されていたと考えられる。しかし、第3トレンチの南側付近から薄い客土を施し、南に向かうにしたがって客土は増し南端では現地表から1.85mの深さを測る。底面の地山は南に緩斜面をなし段状に地山整形を行っている。土層図で観察すれば、まず南端の最深部は地山整形し段状をなす。この段部の上端までを赤橙色粘質土、暗茶褐色(雲母片岩片混入)、暗黄褐色粘土で盛土をしている。南側ではこれらの層を貫く形でピット状の落ち込みが認められるが、築城時に何からの棒状のものを立て盛土の目安としていた可能性がある。その上層は明茶褐色粘質土と赤橙色粘質土を交互に積み上げ、前者の土層内には多量の雲母片岩を混入させていた。北側の段落ちの9層、11層及び4層には炭化物が混入していたが、この炭化物は築城時の混入である。築城当時の生活面は南端に築かれた簡易な石垣のレベルから推察して同レベルである3層、5層の上面と考えられ、1層、2層は後世の整地層になる。このように考えると、本丸の南側には土塁は築かれていないことになり、土層図で見るとかぎり土塁の痕跡はない。

遺物の出土状態は上層及び中層から土師器(小皿)・染付・青磁、下層から土師器(皿)・白磁などが出土しているが、調査時に上層と下層の土器が若干混入した。しかし、出土した土器類はいずれも築城時の混入であり、山城が機能していたある時点で大規模な補修がなされた可能性がある。

Ⅲ区南北トレンチ(図版9-(2)・10-(1)、第3図)

第二次調査で北側の築城技法を再確認したトレンチである。搦手門と推定される箇所は現在管理道路となっているため、第1トレンチの延長線状には設定せずやや東側にずらすして設定した。トレンチの幅0.8m、総延長13.6mである。

土層図で観察するかぎりでは、第1トレンチと同様本丸中央部は地山を完全に削平し、北側は盛土をし面を整えている。しかも、盛土部分に旧地表が認められず、地山を削り出していることが理解されよう。第1トレンチと技法上異なる点は地山整形で、段状には掘削せず一気にしかも水平に地山まで掘り下げている。盛土に使用された土は黄褐色・茶褐色・赤橙色系の山土を使用し大半が粘質土で積まれている。猫尾城当時の面は7層及び8層下面が相当すると考えられ、南側の削平された地山面と同一レベルにあることから納得できよう。さらに、北端の土層図で分かるように、この部分には黄色土系の土で土塁を構築しており、その内側には一



第4図 I区第1トレンチ(上)、III区南北トレンチ(下)土層図 (1/60)

- | | | |
|---------|---------|---------|
| ①表土 | ⑩暗褐色粘質土 | ⑮暗褐色粘土 |
| ②暗褐色粘質土 | ⑪暗褐色粘質土 | ⑯暗褐色粘質土 |
| ③赤褐色粘質土 | ⑫暗褐色粘質土 | ⑰暗褐色粘質土 |
| ④暗褐色粘質土 | ⑬暗褐色粘質土 | ⑱暗褐色粘質土 |
| ⑤暗褐色粘質土 | ⑭暗褐色粘質土 | ⑲暗褐色粘質土 |
| ⑥暗褐色粘質土 | ⑭暗褐色粘質土 | ⑲暗褐色粘質土 |
| ⑦暗褐色粘質土 | ⑭暗褐色粘質土 | ⑲暗褐色粘質土 |
| ⑧暗褐色粘質土 | ⑭暗褐色粘質土 | ⑲暗褐色粘質土 |
| ⑨暗褐色粘質土 | ⑭暗褐色粘質土 | ⑲暗褐色粘質土 |

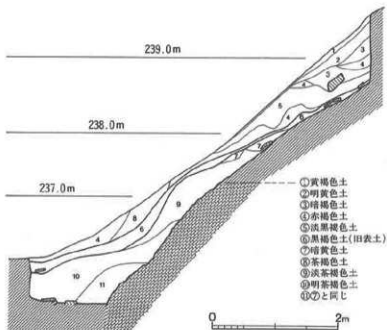
段乃至二段の石組で土留めの措置を講じている。しかし、現状での土塁は極めて低く、後世流出したかあるいは削平された可能性がある。

平面観察では、地山整形された下端にあたかも河原石と割り石を並べたかのような石列が看取できる。トレンチの北側の地山面には河原石と割り石が集積されたかのような形で出土しており、一種土留めの役割を果たしていたとも受け取れる。

出土遺物は上層で土師器・青磁・白磁・染付の他管状土鍾、下層で土師器の皿が出土している。平面図で見る土師器の皿は11層からの出土で、土器の周辺には焼痕が残り、築城時に焚き火をしながら飲食をしたことが推測される。

第20トレンチ（図版4-(2)、第5図）

本丸の北側斜面に設定したトレンチで第1トレンチの延長上に当たる。上端が管理道路の部分に接するため地山の面までは掘り下げていない。土層図で観察する限りでは、この部分の石組は見られず単に盛土を施しているのみである。このことは、前述したように当地が堀め手門の部分に当たることと関係があるとも考えられる。当該トレンチで特徴的



第5図 第20トレンチ土層図 (1/60)

なことは、第6層に旧表土が観察されることである。この旧表土を境に下層の堆積は城が破却された時点での堆積と推察される。上層は下層で堆積した土質とは全く異なった土で客土している。この層は後世の補修なのか昭和期の整地なのかは明確でないが、土層の堆積に顕著な締まりがないことから管理道路設置時の二次堆積の可能性が高い。

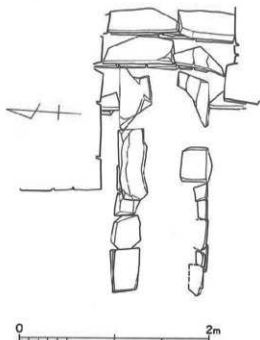
地山面を見るとトレンチの約1/2に片岩質の岩盤が見られ、その上層は赤褐色土が堆積している。露出した岩盤面は削り出しの整形を施しており急斜面を形成している。しかも、岩盤の途

切れるレベルと第Ⅲ区南北トレンチの地山面のレベルがほぼ等しいことから、赤橙色土は盛土であることが分ると同時に築城時には岩盤が露頭していたと推察される。

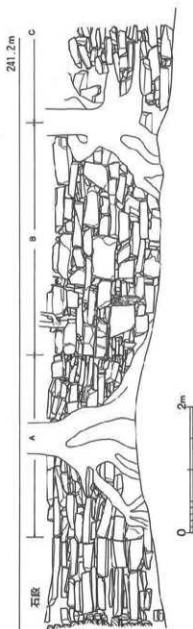
遺物出土状態は10層と11層から出土しており、土師器(Ⅲ)、染付(Ⅳ)がある。

本丸頂部石垣 (図版5-(1)・(2)、第6、7図)

当該石垣は本丸平坦部の東側(三の丸側)に巽櫓と良櫓を取り込んだ一段高所部分である。現況では英彦山権現を祭る堂宇までは石垣を構築しているが、北側は石垣が露出していない。前面の石垣は本丸の石垣に繋がっており、平面的には長方形を示すが、堂宇の北側は一部屈折して築かれ堂宇正面の石垣は若干突出している。高所部分の規模は幅42m、奥行11m~12m、高さ1.5~1.7mを測る。正面の石垣は大小の片岩の割り石を平積みし面



第7図 館址石段実測図 (1/60)



第6図 館址石垣実測図 (1/60)

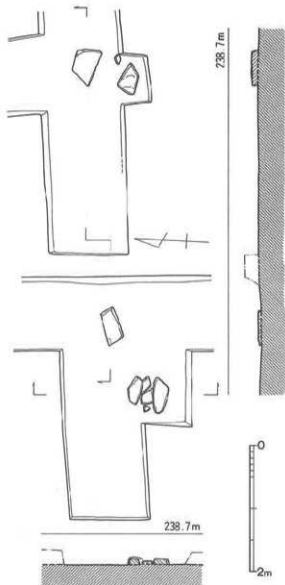
を整えている。北側の石段から南側の石垣を観察すると、紅葉の古木があり不明瞭ではあるが、三か所に積み方が異なっているのが指摘できる。この区割りの長さは約3mを測る。A区は扁平な板石をやや雑に積み、B区との境界部分に小ぶりの平石を乱雑に積んでいる。B区は大振りの石材と板石を丁寧に積上げ隙間に小振りの石を詰め込んでいる。C区は椎の木の大木で崩壊しかかっており、積み方が明瞭に観察できないが、A区と似通った積み方である。区割りした石垣の構築は築城時の石垣普請の役割毎の作業工程を示唆するものと考えられる。

階段部の調査で判明したのであるが、新しい敷石を挟むような形で石垣の根石が確認された。根石の表面は現存する石垣の表面と一致しており、本来は石段の部分にも石垣が築かれていたと理解され、この石段は後世築かれたことになる。

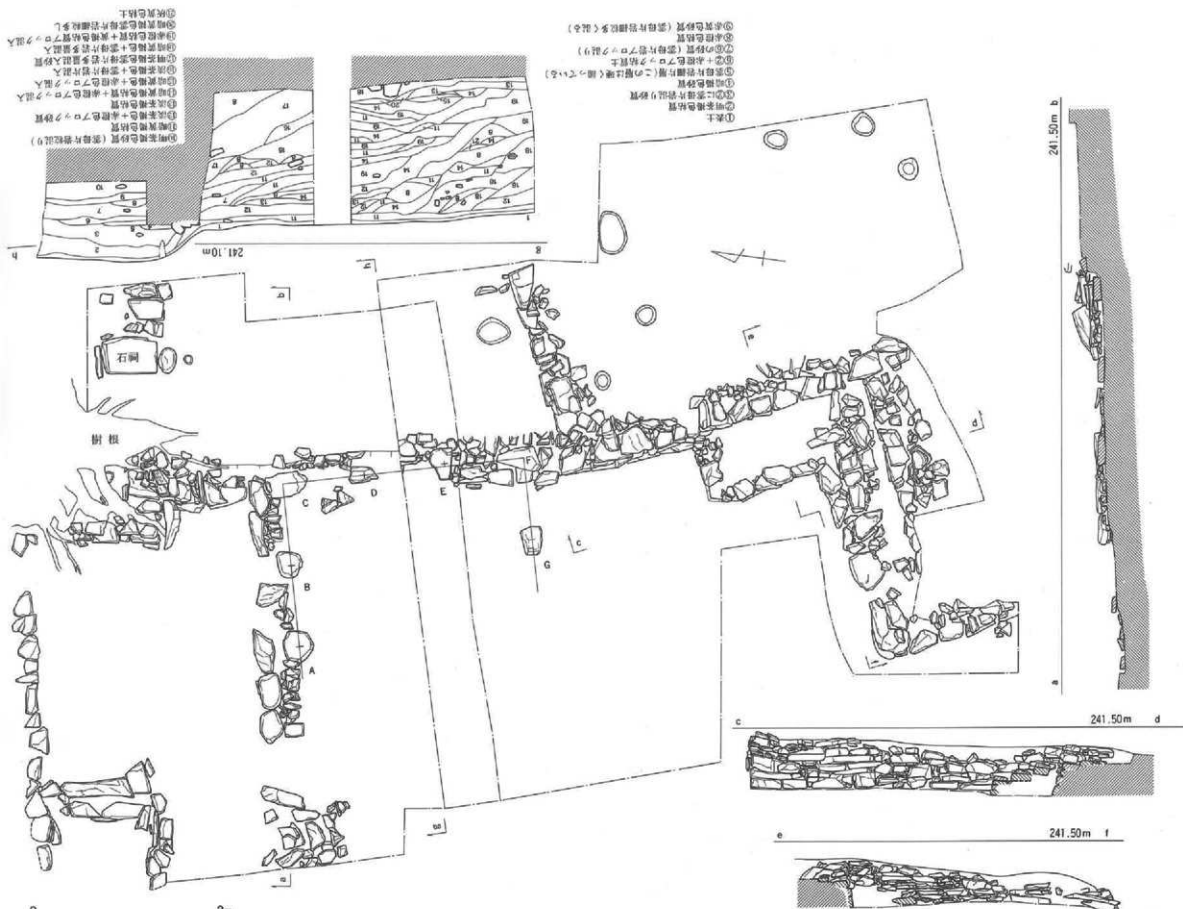
さらに、堂宇の正面に構築されている石垣はこの根石の確認から、昭和三年に再建されて堂宇の建立時に再構築したと判断される。となると、正面の石段も後世の構築となる。堂宇の北側で検出した第21トレンチの石組みと面的にはほぼ一致することからも可能性が考えられる。

また、調査Ⅱ区の東西トレンチで判明したことであるが、石垣で圍繞された高所部分は石垣の上端まですべて盛土で築かれていた。まず、東側に土塁を構築し、その後本丸の中央部に沿って傾斜させながら粘質土と砂質土を交互に積上げる。後に内側の石垣に近い部分を客土するという土塁と一体化した築城方法をとっている。

(b) 館 址



第8図 第1トレンチ遺構実測図 (1/60)



第9图 II区遗址平面图 (1/60)

第1トレンチ (図版6-(1)、(2)、第8図)

第1次調査で本丸の南側に設定した第1トレンチから数個の板石を確認した。検出した片岩は周辺に散在している河原石の礎石から片岩の板石が礎石であるという確証はない。しかし、検出した四個の板石の表面のレベルがほぼ等しいこと、同トレンチの土層図から猫尾城当時の土層上に位置することなどから館址に関する遺構であることは確かである。第1トレンチの西側拡張区で検出した板石は礎石の根石と考えることもできる。また、南側平垣部で検出した板石は四個のみで規則性はない。A～Bの断面図で示したように現況での板石の間隔が4.20mを測り、この間を柱間とするには間隔が広すぎ、破却時か後世の整地で礎石が除去されたことが指摘できる。いずれにせよ、この付近に館が存在したのは確かである。

調査 II 区 (図版7-(1)～9-(1)、第9図)

当該調査区は本丸高所部分の堂宇の南側に相当する。北側は植樹及び記念碑が建立されており調査不可能である。調査は館址に止まらず土塁、櫓台址にまで及んだ。ここではII区で検出したすべての遺構を説明する。

最頂部の平坦面は約72㎡を測り、奥行きが6.0mと狭い。北側で検出した板石列は堂宇の区画石列で新しく築かれたものである。東側の石組みは土塁内側の石垣であるが、旧状を保っておらず、一部櫓台の石垣に接する部分が遺存しているのみである。北東側には楓の樹根が取り巻いているが、二段乃至三段の石段が組まれており、その正面の土塁上には河原石と板石に挟まれた形で大振りの偏平石が据えられている。偏平石の後方には方形に板石を敷いており、時期は不明確であるが石祠の痕跡が残る。正面の石段は、後世石祠を拝礼するために土塁の石を利用し組まれたと推測されよう。石祠の裏から寛永通寶が出土している。

土塁は幅4.0m、高さ0.6mを測る。内側の石組みの高さは40cm前後を測り、櫓の石組みよりは低く構築されている。土塁と櫓台の石垣面は直線的に築かれているが、両者とも煩雑な構築である。また、櫓台から南側の土塁にかけては「L」字状に石が組み、石組みに沿うように一段の控えの石組みを配するが、櫓沿いの控え積み内は0.8m×1.2mの規模で茶褐色粘質土で埋めている。控え積みが当初の普請であるか否かは定かではない。南の土塁の長さは4.3m、現況の高さは0.5mを測る。

櫓台の遺構検出を試みたが、不規則なピットを検出したものの主だった遺構はない。聴き取り調査では、櫓台上に四箇所板石が存在したらしく、櫓は偏平な礎石の上に組まれていたと推定できる。

館址については調査区の平坦部に片岩と河原石の礎石が渾然一体に配されているが、東側の

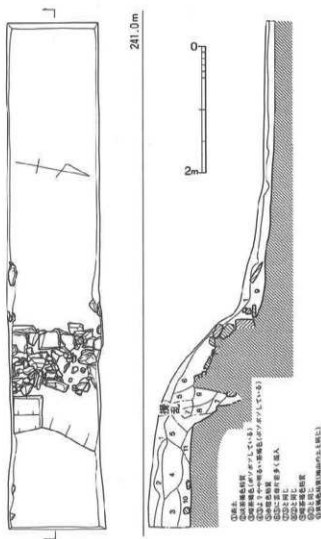
柱間は三間、北側は二間が残るが西側のスペースから三間の柱間を有した建物であったと考えられる。しかし、東側の礎石は土塁の内側石垣を破壊し配置されていることから猫尾城当時の館址とは考えられない。現存する堂宇の棟札に「昭和三年再建云々…」と記されており、当初江戸末期から明治期頃に旧堂宇が建立され、昭和三年の御大典記念時に隣接して再建されたと考えられよう。中世の館址には河原石の礎石が使用された可能性が強い。ちなみに、各柱間はA-B、B-C、C-C、F-Gが1.30m、D-E、E-Fが1.25mを測る。

第21トレンチ（図版10-(2)、11-(1)、第10図）

石碑及び植樹のため二次で部分調査を実施した。トレンチは堂宇の北側に当たり、現状では露出していない石垣の調査に主眼を置いた。

調査の結果、表土から0.65m下層で地山を確認したことから、当該部分は地山削り出しの後、掘部に同レベルから高さ約1.00mの簡易な石垣（土留め状の石組み）を築き、上面はかなり雑な組み方をしている。その上層は茶褐色土で客土していることが判明した。II区での調査から、猫尾城当時の面はレベル的に第二層となる。石垣に使用した石材は雲母片岩と緑泥片岩である。本丸平坦部は0.15mで地山となる。

この調査区の結果から、本丸頂部の南側と北側では石垣の構築方法が明らかに異なっている。これが何に起因するのか現状では理解できない。堂宇の部分の発掘に期待したい。

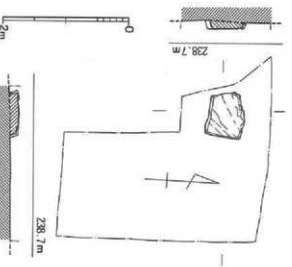


第10図 第21トレンチ遺構、土層実測図 (1/60)

(c) 門 址

第2トレンチ (図版11-(2)、第11図)

山城の門は冠木門と想定されている。大手門を調査するため第2トレンチを設定した。堀き取り調査では、階段工事以前には大振りの片岩の石段が二列に並列した状態で遺存していたらしく、斜面にコンクリートの階段工事をする際に除去したらしい。門に向かって右側は土砂が流失しており、既に大手門の礎石は除去されていた。備にかなり大振りの片岩が放置してあることから、この片岩が門の礎石として使用されていたと推測される。



第11図 門址礎石実測図 (1/60)

左側の斜面の上端近くには65cm×55cm、厚さ15cmの門の礎石と考えられる片岩が元位置を保っていた。礎石と槽台との間隔は約2.00mを測り、この間には横列を築いていたと想定される。しかし、調査でその痕跡は確認できていない。

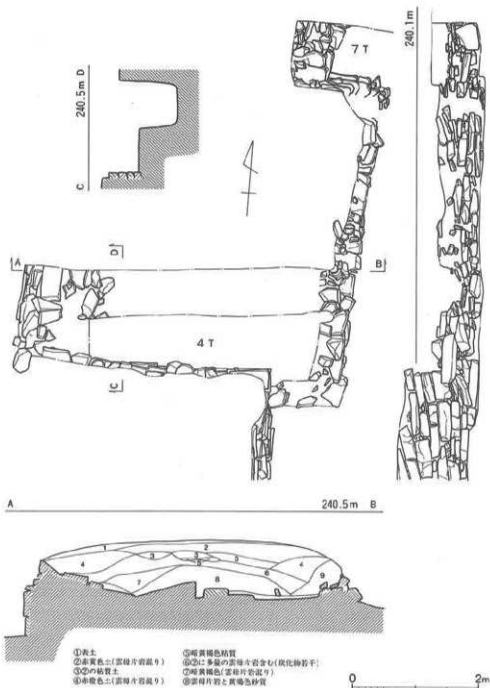
出土遺物は染付(皿)がある。

(d) 櫓 址

第4・7トレンチ (図版12-(1)、(2)、第12図)

本丸での精路は、具櫓、翼櫓、西櫓の三カ所が確認されている。本トレンチは西の櫓部分に当たるが、櫓台の石垣は大振りの片岩を平積みには横上げ強固な櫓台を形成している。櫓台の上表面は、II区で調査をしたが明確な遺構は検出できず、堀き取り調査で礎石が取り除かれていたと言う事実から、調査を実施していない。しかし、大手門間の櫓台の北側に抜いた形で方形区画が設けられており、この実態を把握するため二本のトレンチを設定した。

調査の結果、方形区画は一辺5.20m、内側の石垣の高さ0.7mの規模を有していることが判明した。しかも、内側の石垣はかなり乱れており、ある時点で石を抜き取られた形跡がある。石垣は北側で土塁と繋がり、南側の櫓台とは繋がるものの直接的な連続性は認め難い。つまり、



第12図 第4、7トレンチ遺構、土層実測図 (1/60)

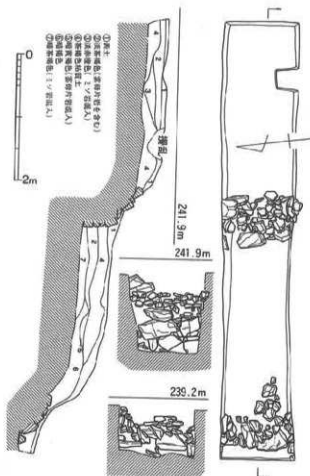
櫓台は当初北側に設置していたが、後に南側に建て直しを図ったと判断される。土塁及び旧い櫓台の内側石垣の方向性に対し新しい櫓台の石垣は若干鋭角に構築されており、断定はできないが可能性の問題として留めておく。

第4トレンチの客土状況を観ると上面が蒲鉾型を呈しており、まず外側の石垣に対して内側の石垣を築きながら9層目を積み上げ、カルデラ状に基礎を築いた後蒲鉾状に盛土している。最下層の地山は片岩で構成されており、かなり整形がなされている。

出土遺物は古備前の大甕片が出土している。

第22トレンチ (図版13-(1)、第13図)

当該トレンチは長櫓台に位置する箇所、植樹が多いため部分的な調査しかできていない。櫓台の規模は南北8.0m、東西4.0mを測り、平面形状が長方形を呈する。櫓台の西側は、幅3.0mの武者走り状のチラスが形成され、北側の土塁に繋がる。この平坦面は櫓台の南側付近で切れ、第21トレンチで確認した館址の面とは有段をなす。櫓台の内側の石垣は、根石から四段目までは整然とした石垣を構築しているが、上面は雑な積み方で一部石材が抜かれている。土層図で観る第2層のレベルまで築かれていたはずである。武者走りの内側の石垣もかなり乱れているが、一種土留め状の石組みとして積み出されたと考えられ、第21トレンチで検出した石組みに繋がる。いずれにせよ石垣は、城の破却時にかなり破壊されたことが推測される。



第13図 第22トレンチ遺構、土層実測図 (1/60)

(e) 土 塁

第5トレンチ (図版13-(2)、第14図)

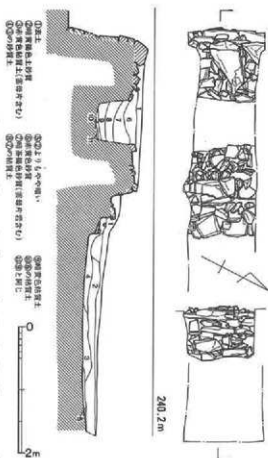
本丸の西側、大手門の右手に位置する土塁に設定したトレンチである。この部分の土塁は遺存状態が良く、地形に沿って「く」字状に築いている。トレンチは土塁の築城方法のみを調べるため、幅1.00mと狭くした。この部分の本丸外側の石垣は、大きめの片岩を面を整えて7段の平積み(高さ1.30m)にし、根石から約1.00m幅で武者走りを形づくっている。外側石垣の上面には小振りの片岩で奥行き0.8mの裏込めをし、内側の石垣の裏込めは奥行き0.5m程で同様の岩片を使用している。その間には下層に粘質土、上層に砂質土を充填しており、この部分に柵列を構築していたと考えられるが、本トレンチ内では検出できていない。

内側の石垣は外の石に比較してやや小振りの片岩を使用し、段状に構築して蹴上り部を形成している。二段築成は本丸を挟んで南側の土塁には認められるが、北側の土塁には見られない。土層図では猫尾城の面は最下層の層位となり、その上層(1層～5層)は後世の整地層である。蹴上り部分の高さは0.45m、土塁までの高さ0.8mを測る。土塁の幅は上端で2.25m、裾部の幅は3.30mを測る。

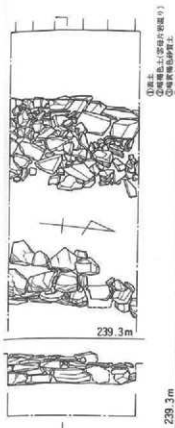
出土遺物は瓦質土器(土鍋)の破片が一点ある。

第6トレンチ (図版14-(1)、第15図)

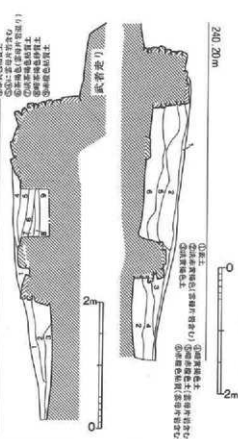
当該トレンチは本丸の正面に位置する土塁の遺存状態の良い場所に設定した。調査の結果この部分の土塁は第5トレンチで検出した土塁とやや様相を異にしている。外側の本丸石垣と武者走りは同様であるが、内側の石組は顕著な蹴上り部を造らず、僅かな落差で二段組みをなす。また、外側の石垣の上面は大小の片岩を敷き詰めているが、内側の石組は第5トレン



第14図 第5トレンチ遺構実測図 (1/60)



第15図 第6トレンチ遺構実測図 (1/60)



第16図 第8トレンチ遺構実測図 (1/60)

チの様な石敷きは認められない。蹴上り部の石は三段積みで上段は二段積みとなるが、二段目の石はこの部分で途切れる。石垣間には第5トレンチと同様の砂質土と粘質土を交互に盛土しているが、盛土部分が幅広となる。土塁の上端の幅は3.0m、当時の面からの高さ0.45mである。外側の根石と内側間での幅は3.30mを測り、第5トレンチで計測した数値と略同数値を示している。

第8トレンチ (図版14-(2)、第16図)

本丸正面に向かって右手の土塁に設定したトレンチである。この部分は大手門を挟んで南側の土塁ほど顕著な高まりは認められない。本丸の石垣部分は整然と平積みされ、裏込めの石も整然と積まれている。内側の石垣はやや乱れてはいるものの四段積みであるが、南側の土塁のように二段築造ではなく、武者走り部分も広い。

外側の石垣の高さは0.7m、内側の石垣の高さ0.45m、石垣間の内法は2.30mを測る。

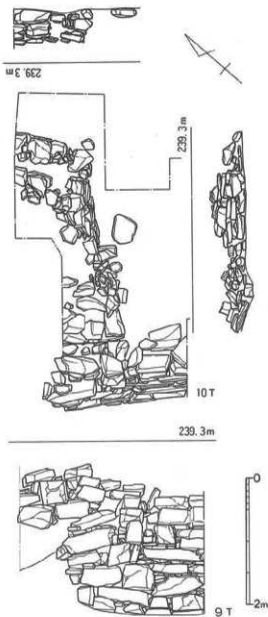
第9・10トレンチ (図版15-(1)・(2)、第17図)

本丸の南側、土塁と石垣部分に設定したトレンチで、調査中にこの部分の石垣普請に若干の疑問が生じたため拡張することとした。

調査の結果、階段状の蹴上を形成した土塁は、第10トレンチで完結する。土塁の幅は3.10m、高さ0.60mを測る。しかも、土塁の南傍には川原石の礎石が出土し元位置を保っていることから、土塁に接する形で何らかの建物が存在したと考えられる。しかし、出土した礎石が一個であるため建物の規模は不明である。

また、本丸の石垣は第9トレンチの部分で一旦途切れ、約30度の傾斜を有す蹴上がり状遺構を構築している。蹴上遺構は、本丸西側の石垣の周囲を巡る幅1.0mの武者走り遺構に繋がるが、現状では明確な石段を呈していない。

更に、土塁を構築する部分の石段と蹴上がり遺構以南の石段は、0.5mの高低差を有す。この部分の石垣沿いには武者走りを造り出しておらず、一段下部から築き上げ、その高さは約2.0mを測る。この構築状態は第1トレンチで検出した石垣では認められず、南側の屈折部からは石垣普請の様相を異にしている。この落差を有す頑強な石垣を構築した意義は、建物の存在を肯定する資料ともなり、第10トレンチで検出した礎石がその証拠とも言える。



第17図 第9・10トレンチ遺構実測図 (1/60)

第12トレンチ (図版16-(2)、第18図)

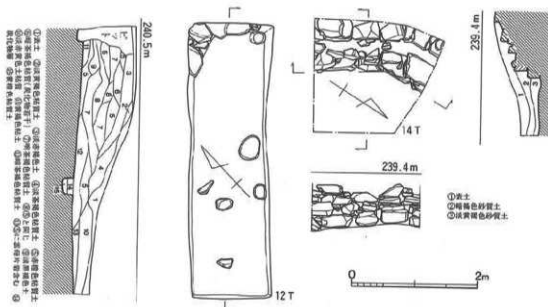
本丸北側、搦手門の東側に位置する土塁の調査のため設定したトレンチである。現況での土塁は西側の土塁ほど明瞭に遺存しておらず、僅かな高まりを残すのみである。調査の結果、土塁内側の石垣は築かれておらず、盛土による簡易な土塁であることが判明した。トレンチ内からは三個のピットを検出した。

土層図で観れば、石垣の内側に客土層を貫く深さ0.88mのピットが掘られており、これが柵列の痕跡の可能性がある。このため、急遽第27トレンチを設定し柵列を確認したが土質の判別が難しく検出できていない。最下層が当時の整地面で、その上に粘質土を主体とした土を盛り上げている。1・10・13層は後の堆積層である。また、土塁の裾近くに整地層を掘り込んだ浅いピットがあり、客土層から切り込んでいないことから土塁設計時に関係するピットの可能性も考慮される。

出土遺物は土師器(Ⅲ)、白磁(Ⅲ)、染付(Ⅲ)がある。

第14トレンチ (図版17-(1)、第18図)

本丸西側の屈折部に設定したトレンチである。この部分も整然とした二段築成で遺存状態は良好である。屈折部の角度は147度であるが、上段と下段の屈折部は僅かにずれた箇所を設定し



第18図 第12、14トレンチ遺構実測図 (1/60)

ている。

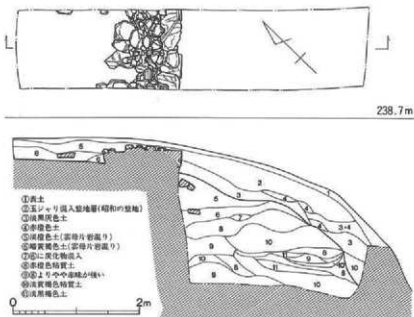
第15トレンチ（図版17-(2)・18-(1)、第19図）

本丸の石垣を想定した箇所に設定したトレンチである。現況の南斜面は急斜面を形成しているが、この部分のみ石垣は露出していない。土塁を構築していないのも南側のみである。

調査の結果、南側には頑強な石垣は構築しておらず、片岩の割り石を平積にしていた。石組みの表面は整えているものの、上面は小さな片岩を無造作に積みあげている。石組みは二段と低く、本来の形状を保っているか否かは明らかではない。現況では防御的效果は薄く後世の削平を受けているとも考えられる。石垣の高さは、0.20m、奥行きは1.20m前後を測る。

土層図では石垣の内側の1・5・6・8層が後世の堆積層あるいは整地層である。石垣の外側は大規模な盛土を施し、図示した太線が当時の築城面と考えられ、3層が表土層であろう。となると、3層より上層が後世の堆積層となる。盛土過程では粘質土を多用し、上層には雲母片岩混じりの土を積んでいる。図示した最下層は地山ではない。外側の客土層は緩斜面をなしており、防御効果は弱い。現況の本丸で南側が最も防御が弱く、石垣の外側に柵列を巡らしていたか、逆茂木などの措置を講じていた可能性がある。

出土遺物はないが、2層に新しい廃棄物が投棄されていた。



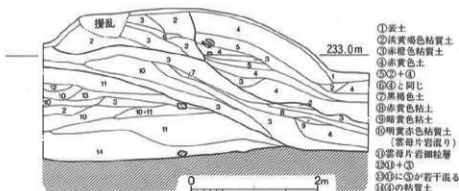
第19図 第15トレンチ遺構実測図 (1/60)

第16トレンチ (図版18-(2)・19-(1)、第20図)

当該トレンチは、本丸と三の丸間の堀切と腰曲輪との境界部分 (標高234m付近) に舌状に築かれた土塁部分で、土塁は本丸の南東隅の盛土の高まりを利用し、曲輪の端まで構築することで曲輪内の敵の侵入を防御するための措置である。土塁の東側は削られ急斜面とテラス状の平坦部を形成しているが、当時の作業痕なのか後世の削平なのか定かでない。当然土塁の上には櫓列や逆茂木の防御策が講じられていたであろう。曲輪内との比高差は1.80m前後である。

トレンチは土塁の盛土状況を観察するために設定したが、東側は急傾斜を呈しているため未掘である。土層図で観る限り、土塁は四工程 (図示した太線の部分) の盛土からなる。第一工程は、赤黄色の粘質土をベースにし、雲母片岩と粘質土を交互にしかも平積みで盛り上げる。第二工程は粘質土を多用しやや内傾させながら地表で観察できる土塁の枠外まで盛り上げていく。第三工程は土塁の東半分を粘質土で固め、第四工程として西半分を積みあげている。ちなみに地山面からの高さ2.35mを測る。

遺物は盛土内から15世紀後半頃の土師器 (皿)、鉄葉が出土している。土塁は天正12年 (1584) に豊後勢から攻め込まれる寸前に堀切とともに築かれたと推考され、構築時に混入した土器であろう。



第20図 第16トレンチ遺構実測図 (1/60)

(f) 曲 輪

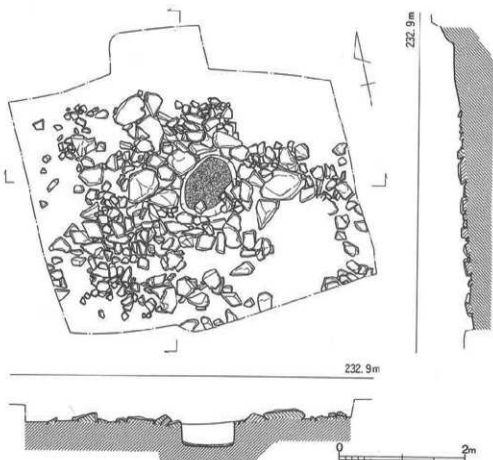
第18トレンチ (図版19-(2)、第21図)

当該トレンチは本丸南側の曲輪に設定したが、雲母片岩の敷石を検出したため拡張した部分である。敷石遺構は曲輪のほぼ中央に造られ、大小の不揃いの割り石を敷き詰めているが、平

面形状は不定形を呈している。敷石のほぼ中央部には1.0m×0.80m、深さ0.40mの楕円形の土壇を掘り込んでいる。土壇の周囲には大振りの板石を選んで敷いているように看取できる。

土壇内は赤褐色の覆土で充満していたが、底面には炭化物が3cmの厚さで堆積していた。土壇の壁面の焼痕は認められないが火の使用は確実である。土壇の用途は実証する資料はないものの、豊後の大将志賀道雲の城攻めの時、城内から「吊り堀を落下したり、逆茂木を立てたり、大石や煎砂を撒いたり」したらしく、想像を逞しくすれば、当時、砂を煎るための土壇と推測することもできよう。

城の縄張りである猪山は、地形的には南側がやや緩斜面を呈しており、北側は急斜面をなす。豊後勢は天正12年7月に猪尾城の南西に位置する峯切畑に2万余騎の陣を敷いたと考えられており、南側斜面から攻め入ったと推測され、南曲輪に防御のための施設を構えることの必然性が理解されよう。

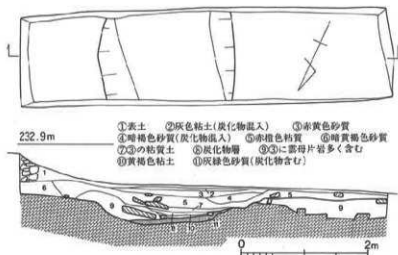


第21図 第18トレンチ遺構実測図 (1/60)

第19トレンチ (図版20-(1)・(2)、第22図)

本丸南西に位置する曲輪の部分に設定したトレンチである。現在は遊歩道として利用されている。

調査の結果、表土から0.25 m ~ 0.45 m で岩盤に達した。岩盤は俗称ミソ岩と称される岩で軟質の岩盤で



第22図 第19トレンチ遺構実測図 (1/60)

ある。図示した様に、トレンチ内には一部岩盤を断面逆台形の浅い溝状にくり貫いている。くり貫き部の上幅は2.15m、底面幅は1.40m、岩盤までの深さ0.30mを測り、現在の遊歩道に繋がる。遊歩道部分は板木の階段が設置されており、すでに岩盤が露出している。

土層図で観ると、本丸の裾部には上からの落石が表土層に見られ、上層には流水による砂質層が堆積している。9層は雲母片岩混じりの粘質土で、曲輪の外側は水平に堆積しており故意に埋土した様に看取できる。本丸側の9層は対する形で堆積しており、作為的な客土の様に考えられるが定かでない。最下層の11層は炭化物を含む灰緑色の砂質土が堆積しており、この面は非常に硬く締まっている。この結果から、岩盤くり貫き部は大手門に通じる通路と考えることができよう。上層の8層も炭化物の堆積が認められ、やや硬く締まっていることから補修後の通路の可能性も否定できない。図示した板石は落城時破却時に落下したと推測されよう。

遺物は土師器(土鍋)、青磁(皿)が7、8層から出土している。

第29・30トレンチ (図版21-(1)・(2)、第23図)

第一次調査で確認した大手門に繋がる通路の再確認と傾斜部が階段状をなす可能性から、設定したトレンチである。

第29トレンチは第19トレンチと略同様の内容を示している。中間層である7層を境に上層は

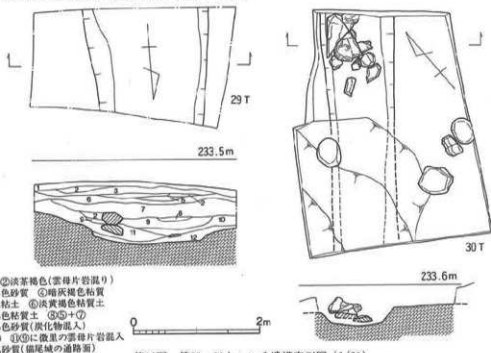
後世の客土と考えられ、下層は猫尾城当時の堆積層である。9、10層には炭化物が混入しており19トレンチの8層に相当する。11層は砂質土に多量の雲母片岩が混入しており本丸方向からの流入である。12層が猫尾城当時の通路面に当たり、灰白色の砂質土を敷いている。岩盤の挟り込みは浅く約0.20mである。幅は大手門に近づくに従って狭くなり1.65mを測る。この付近の傾斜角度は5度と緩やかである。

第30トレンチは、コンクリートの階段を建設する時点まで大手門に上る幅広の板石の石段が遺存したと云われる直下のトレンチである。

この部分の岩盤は急傾斜をなしており、一見岩盤整形がなされているかの様であるが、明瞭な階段は削り出していない。しかし、岩盤まで掘り下げると29トレンチで検出した通路とレベル的に整合しないし、トレンチの南側はやや掘り過ぎの感がある。北側に砂質土の硬く締まった層が認められたが、このレベルが通路であろう。この底面に接する形で本丸に使用した板石が出土している。通路のそばには館の礎石に使用された三個の川原石が出土したが、破却時に投棄されたと考えられる。

以上、本丸の南西部分の曲輪の調査で判明したことは、馬場から本丸に通じる遊歩道が当時の登下城道と推察され、曲輪の平坦部が単なる通路ではなく、特別に岩盤をくり貫き登下城道を形成していた。

出土遺物は土師器(Ⅲ)、染付(Ⅲ)がある。



第23図 第29、30トレンチ遺構実測図 (1/60)

(g) 出土遺物

本丸第1トレンチ出土遺物(図版28・29、第24図)

ここに図示する遺物は、本丸築城時の盛土内から出土した土器で、土師器、瓦質土器、白磁、青磁、染付、赤絵等がある。出土状態は上層が少なく中間層及び下層、最下層からの出土が多いが、大半が破片である。調査時点で土器を若干混在して取り上げた関係上共伴関係に不明な点が残る。

土師器

皿(1～5) 1・2・4・5はトレンチの南側最下層から出土し、3は下層からの出土である。口径の割には底径が大きく、3は1・2から派生するタイプのものでやや器高が高くなる。すべて糸切り底で、4は形態が異なり口径に対して器高が低い。1は口径7.8cm、器高1.6cm。2は口径8.0cm、器高1.5cm。3は口径8.2cm、器高1.9cm。4は口径8.0cm、器高1.3cm。5は口径8.2cm、器高1.7cmを測る。14世紀中～後半頃の所産。

土 鍋(27) 最下層からの出土で、胎土に小砂粒を多く含み外面に煤が付着する。小片のため復原口径が大きすぎる感がある。

描 鉢(24・26) 両者とも最下層からの出土で、24は口唇部を肥厚させる。6本単位の筋目がある。26の口縁は片口となる。内面は5本を単位とする筋目がある。内外面とも摩耗し調整は不明。復原口径は30cmである。胎土は緻密で褐色粒を含む。14世紀中～後半頃の所産。

白 磁

壺(6・7) 直口壺で南側下層から出土した。両者は同一個体の可能性がある。頸部から口縁にかけては僅かに内傾し、肩部は大きく張る。胎土は精緻で乳白色を呈し、釉調は混濁白色で釉は厚くかけられている。口縁内側には釉だれが認められる。

皿(8) 南側最下層から出土した所謂「枢府磁」と称されている皿である。内面に花唐草文を押捺している。高台は斜行し畳付から内側にかけては露胎である。器内は薄く造りは良好である。胎土は淡白色を呈し、釉は薄く掛けられ淡青白色である。復原高台の径は4.9cmを測る。同類の皿は太宰府推定金光寺跡第Ⅱ期整地層から出土している。14世紀中～後半頃。

碗(9) 最下層からの出土で破片を復原実測した。口縁部は外反し胴部は丸みを有す。高い高台を削り出し、底部外面はへうで削り露胎をなす。見込みには細い沈線を巡らす。胎土はやや粗く黄味褐色を呈し、釉調は発色が悪く黄味灰色で、内外面に貫入が見られる。復原口径は15.7cmを測る。太宰府の調査でS D205から同類が出土している。14世紀後半頃の所産。

青磁

皿(10・11) 10は青磁の小片でトレンチの上層からの出土である。口縁部を僅かに外反させる。胎土は明灰色を呈し精緻である。釉調は淡いオリーブ色で、貫入が認められる。11は李朝青磁の皿で上層からの出土である。胴部から口縁部にかけては直線的に伸び、胎土は淡い灰色を呈する。釉は発色が悪く、くすんだ黄味灰色である。口唇部は露胎である。復原口径11.1cmを測る。両者とも16世紀後半頃。

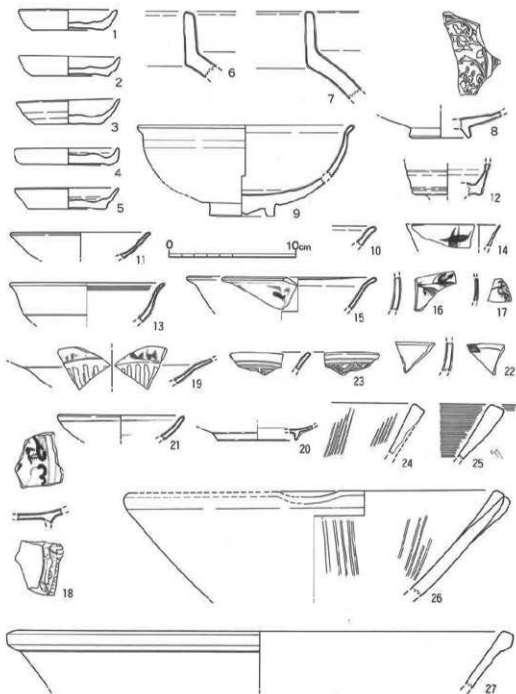
香炉(12) 下層から出土した小片で口縁と底部の一部を欠損する。体部下半から底部にかけては器肉が厚く作られ、2条の沈線が巡る。底部には低い高台が付き三足を付すタイプの香炉であろう。胎土は緻密で良く、釉は淡濁青色を呈するが、細砂粒が付着し、しかも二次加熱を受け釉内に極小の気孔が目立つ。14世紀後半頃の所産。

碗(13) 排土中から採集した。胴部はやや丸みを有し、口縁部は緩く外反する。口縁内面には2条の沈線を巡らし、胴下半にも1条の沈線が巡る。胎土は精良で釉調は淡黄味灰色を呈し発色が悪い。新しい時期のものかもしれない。

染付

皿(15・17-21) 全て中間層からの出土である。15は皿と思えるが碗の可能性もある。胴部は僅かに丸みを持ち、口縁部は緩く外反する。口縁部内外に1条の施文をし、外面に草花文を描く。釉は淡い青白色で薄く施釉している。二次加熱を受け釉がくすむ。17は小片で外面に花文を描く。器肉は薄い。18は彫り皿の底部片で高台の部分が欠けている。第17トレンチから同タイプの皿が出土しており、それによると高台は高くしかも内傾する。豊付部から高台内面にかけては釉を掻きとり露胎となる。見込み部分には2条の施文を巡らし、濃紺色の草花文を施文する。高台外面には草文を描く。地釉は淡い青白色に発色する。19は18と同一個体か同類の皿である。胴部は僅かに丸みを持ち、口縁部にかけて緩く外反する。胴部内外面はへらによる縦の凹線をつけ隆起帯をつくる。口縁外面には細い沈線を巡らし文様帯と区画する。染付の施文は薄い青緑色を呈し不明瞭である。地釉は青味白色で発色は良い。胎土は灰白色である。20は高台部分の小片で器肉は薄い。高台はやや内傾し低い。見込みと高台基部に1条の施文を巡らす。21は胴部から口縁部にかけて内湾し口縁内外面と胴部内面に1条の施文を描く。釉調は黄味灰色を呈し、貫入が見られる。全て中国明代(16世紀後半)の所産である。

碗(14・16・22) 中層から上層にかけて出土した。14は小片のため復原に疑問が残る。体部から口縁部にかけては直線的で口唇部は尖る。表面には草花文を施文する。上層からの出土。16・22は器肉が厚く淡い紺色の染付で草花文を描く。釉は薄く掛けられ淡水色味白灰色に発色する。16世紀後半頃の所産。



第24図 I区第1トレンチ出土土器実測図 (1/3)

赤 絵

皿(23) トレンチの上層で出土した小片である。外面には2条の横線を巡らし、その直下には山形の幾何学文が描かれている。内側にも同様の区画線を巡らし方形の幾何学文を配する。胎土は精緻で、明灰白色を呈する。地釉は淡い灰白色である。万暦年間(1573~1619)頃の所産である。

本丸Ⅱ区出土遺物(図版30、第25図)

青 磁

碗(1) Ⅱ区の土層の3層(混濁茶褐色)から出土した小片である。口縁部は緩く外反し、胴部はやや丸みを有す。胎土は粗く淡灰色を呈す。釉調は淡い黄味橙色で発色は頗る悪い。釉も厚く掛けられている。16世紀後半頃。



第25図 Ⅱ区出土土器実測図(1/3)

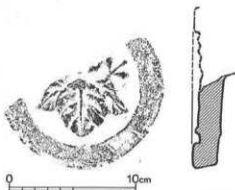
白 磁

小皿(2) Ⅱ区の中央トレンチの3層から出土した小皿状(?)の高台部分である。高台は露胎で内側は斜傾し、畳付は面どりする。見込み部は蛇の目状に釉を掻きとっている。胎土は緻密で混濁白色を呈する。釉は淡い青白色で白色が良い。高台径は2.5cmを測る。

瓦

軒丸瓦(図版30、第26図)

本丸Ⅱ区の槽址で出土した瓦当部分で、内区には橋を配する。周縁は幅広で2.0cm、瓦当幅13cmを測る。Ⅱ区では古い堂宇の軒平瓦の出土はあるが、いずれも新しい。この瓦は江戸中期~後期のものと考えられ、旧堂宇以前に瓦を使った小規模の建物の存在が指摘できる。



第26図 Ⅱ区興槽址出土瓦実測図(1/3)

本丸Ⅲ区南北トレンチ出土遺物(図版31・32、第27・28)

当該トレンチからもかなりの遺物が出土した。遺物出土状態は第1トレンチと同様、盛土内からの出土である。出土した層位は11-a、11-b、15層からが殆どである。

土師器

皿(1~5) 皿は11-a層と11-b層から出土した。1は異形の皿であり類例を見ない。口縁部の割りには底部が大きく、器高は低い。口縁部は直立する。内部底面は横ナデ痕を残す。復原口径9.0cm、底径8.0cm、器高1.4cmを測る。11-bから出土。2は小皿(特小皿)で復原口径5.9cm、底径は3.9cm、器高1.7cmを測る。11-aからの出土。3・4は同タイプの皿で口縁部に比べ底部の径は小さい。体部から口縁部にかけてはやや丸みを有す。3の口径は8.7cm、底径5.3cm、器高1.8cm。4は復原口径9.0cm、底径5.0cm、器高1.7cmを測る。両者とも11-aからの出土である。5は本丸第1トレンチ出土の皿(1・2)から派生するタイプの皿で、復原口径8.9cm、底径6.4cm、器高2.6cm、11-b層からの出土である。

坏(6~19) 坏は上から8、9、11-a、11-b層の4層から出土しているが、8・9層は層位的に11-a層に相当する。11-a層からは6・12・13・20が出土し、11-b層からは7~11・14~17・19が出土した。前者のグループは胴部の器壁が厚く、口縁部は尖る。その中でも20はややタイプが異なり、器高が低く口縁部は外反する。各器種の法量は6の口径が12cm、器高3.0cm。12の口径13cm、器高2.4cm。13は口径12.3cm、器高3.0cm。後者のグループは胴部の器壁はやや薄く、その法量は7~11・14~17が口径12.8cm~14.0cm、器高2.7cm~3.0cmの範疇に納まる。胎土は総じて緻密で、すべてに赤褐色粒を含む。

擂鉢(21・22) 両者とも15層から出土した小片である。表面は摩耗し不明瞭であるが、筋目が2本のみ認められる。胎土は砂粒を含まず精緻である。

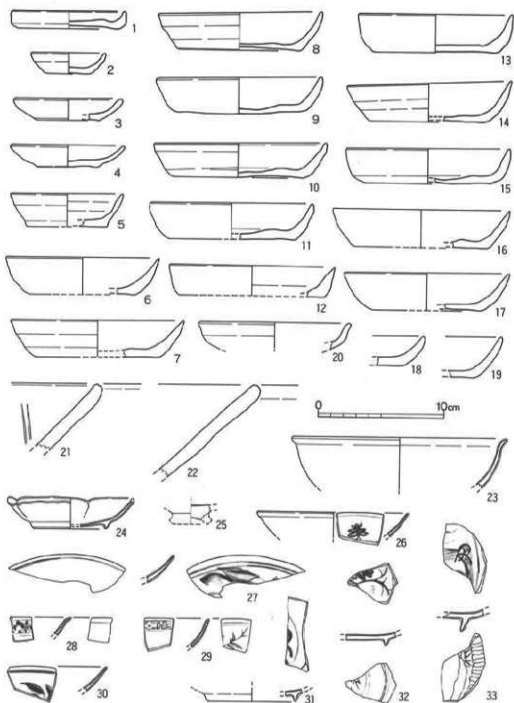
白磁

碗(23) 南北トレンチの15層から出土した口縁部片で、本丸第1トレンチの最下層から出土した碗と同タイプである。胴は丸みを有し口縁部は緩く外反する。胎土は精良で、釉調は緑味灰色を呈する。14世紀後半頃の所産であろう。

皿(24・25) 24は11-a層から出土した輪花口縁をなす皿で、2/3を欠失する。口縁は釉だまり状をなし肥厚する。高台は低くしかも内傾する。量付部にも薄く釉が掛けられている。器壁は薄く、胎土はやや粗い。釉調は混濁白色を呈する。復原口縁は10cm、高台径5.7cm、器高2.5cmを測る。25は本丸Ⅱ区の中央トレンチから出土した小皿(?)と同タイプの白磁である。

染付

皿(26~33・40) 染付の皿はすべて11-a層からの出土である。26は口縁内面には一条の施文をし、その下には花文を配する。胎土はやや粗く、混濁白色を呈する。釉調は淡水色味白灰色である。27は口縁内面に一条、外面に二条の横線を配し、直下には草花文を施文する。胎土は粗く精製されていない。地釉は黄味灰色を呈し、施文はくすんだ青褐色である。福建省・広

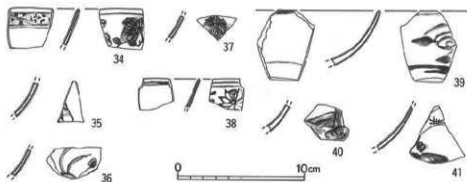


第27図 Ⅲ区南北トレンチ出土土器実測図その1 (1/3)

東省系の皿である。28は口縁部を緩く外反させ、外面に一条の施文をし、内面の口縁下には幾何学文様の施文を施する。器壁が薄い割には軸は厚い。灰味白色の地釉である。29は内面に幾何学文を配し、外面には口縁に二条の区画線、直下に草花文を施文する。地釉は淡水色白色を呈する。30は内面に一条の施文と草花文を配している。胎土は乳白色、地釉は淡水色味白色を呈する。31は低い高台を有し、疊付部には極細の砂粒が付着する。見込み部には一条の施文が巡り、内部には草花文を配する。釉は30に酷似する。32は低い高台を有す皿で、疊付は露胎をなし砂粒が付着する。高台内面は二条の施文を巡らし、その内部に大明年造の印文がある。見込みには草花文を配する。地釉は淡水色味白色で、施文はくすんだ紺色を呈する。33は第1トレンチ出土の彫り皿と同タイプの皿である。40は小片であるが皿であろう。外面にはくすんだ青で草花文を描き、胎土は黄味白色を呈している。釉は淡水白色である。

以上が染付の皿であるが40を除けば全て16世紀後半で、40は16世紀前半～中頃であろう。

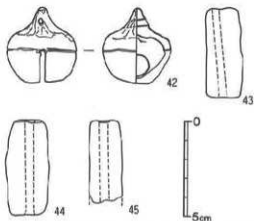
碗(34・39・41) 11-a層の出土である。34は内面に幾何学文を配し、外面の口縁部には横線を施文し、直下には菊花文を配する。胎土は混入物が多く粗い。釉は淡水味白色を呈する。35は碗と考えられるがはっきりしない。36は器壁が薄く草花文を配するが小片で不明瞭である。胎土は精緻で混濁白色を呈し、釉は前記の皿と同様である。37も薄手作りで表面に菊花文を染付する。38は器壁が薄く口縁内面には二条の施文を巡らし、外面には二条の線の直下に蕊を有す菊花様の花文を描く。染付及び地釉の発色は良い。39は内側口唇部と外面口縁部に横方向の施文を施し、見込み上部にも一条線を巡らす。さらに、胴部下半にも無造作に横線を施文する。体部には意味不明瞭な草花文を描いている。胎土は精良であるが、強い二次加熱を受け釉が灰味黄色に変色する。器面には貫入が見られ、外面には気孔、内面には釉の亀裂が認められる。底部付近には一部露胎が見られる。福建省・広東省系の碗である。41は外面に草花文を描く。胎土、釉調は他の染付と大差ない。全て明代(16世紀後半頃)の所産である。



第28図 Ⅲ区南北トレンチ出土土器実測図その2 (1/3)

土製品（図版32、第29図）

鈴（42） 本丸南北トレンチの17層から出土した土鈴の完形品である。作りは非常に精巧で、体部のほぼ2/3まで鋭利なヘレ状の工具で切込を入れている。切り込みと接する上半には細い沈線を描き、吊手部分は摘みあげた後、図示した様に右から左に紐を通す孔を穿つ。中の舌は土を球形に丸めて作りその径は約1.0cmである。舌は上部の盛り上げ時に入れたと考えられ、内面には絞り痕が残る。胎土は精緻で、焼成はやや甘くくすんだ灰褐色を呈する。高さ4.0cm、最大幅3.7cm、厚さ0.4cm前後を測る。出土した層位は最下層に相当することから14世紀後半頃の所産であろう。



第29図 田区南北トレンチ出土土製品実測図（1/2）

管状土鍾（43～45） 15層からの出土である。大形の管状土鍾で穿孔は誰である。3個体とも二次加熱を受け淡く変色する。法量は43の長さ4.7cm、幅1.9cm、重さ16.8g。44は長さ5.0cm、幅2.3cm、重さ24g。45は欠失しているが幅1.7cmを測る。

本丸各トレンチ出土遺物（図版29・30、第30・31図）

第5トレンチ

磁器

皿（1） 胎土に灰色の陶土を含んだ磁器（皿）である。高台は低く畳付と内面は露胎である。釉調は淡い灰褐色を呈する。表面には多くの貫入が見られる。高台径は7.4cmを測る。16世紀後半～17世紀初頭頃の所産。

第7トレンチ

陶器

大甕（2・3） 古備前焼の大甕の破片があるが、小片のため不明な点が多い。

第10トレンチ

染付

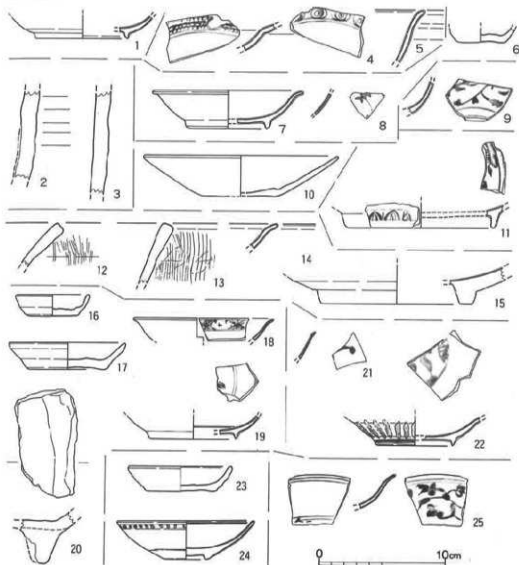
皿（4） 第1トレンチ及び田区南北トレンチ出土の彫り皿と同タイプの皿が出土している。胴部は浅く、口縁部にかけては外反する。内面には居歯文状の文様を密に配し、その間に円文を染付ける。外面は不規則な渦巻き文を配している。胴部にはヘラによる縦彫りにより隆起帯

をつくる。16世紀後半頃の所産。

第11トレンチ

青磁

碗（5） 口縁部が僅かに外反する小片がある。外面は横ナデ痕が明瞭に残る。胎土はやや粗く淡い灰褐色を呈する。釉調は緑灰色であるが、二次加熱を受けていることから本来の釉調ではない。しかも気孔が全面に見られ、一見貫入状に見える。14世紀末～15世紀中頃までの所産である。



第30図 各トレンチ出土土器実測図 (1/3)

第12トレンチ

土師器

皿(6) 所謂特小皿の部類に入るものであるが、小片のため不明な点が多い。糸切り底である。

白磁

皿(7) 胴部は直線的で口縁部を外反させるものである。高台は低く、疊付は釉の掻き取りにより露胎となる。胎土は精緻で乳白色を呈する。釉はやや厚く掛けられ混濁白色を呈する。復原口径は11.9cm、高台径6.2cm、器高3.0cmを測る。中国明代(16世紀中頃前後)の所産である。

染付

皿(8) 小片のため皿か碗か不明である。器壁は薄く、外面には草花文を配する。地釉は乳白色を呈し発色は良い。16世紀後半である。

土製品(図版30、第30図)

管状土鍾(26) 本九Ⅲ区南北トレンチ出土の土鍾とやや異なり細みである。作りは良いが、二次加熱を受け明褐色を呈する。

第13トレンチ

染付

碗(9) 上層で出土した碗で、胴部内面には鮮やかな紺色で草花文を描く。見込み部には二条の境線を巡らす。胎土は精緻で、釉は乳白色を呈し発色が良い。16世紀後半の所産である。

第16トレンチ

土師器

皿(10) 第16トレンチの土塁盛土内から出土した。胴部から口縁部にかけては直線的に広がる。胎土には細砂粒を若干含み、焼成は堅固である。復原口径は15.3cm、底径5.6cm、器高3.2cmを測る。同タイプは太宰府の調査で分類されている坏bにみられる。15世紀中頃～後半に比定される。

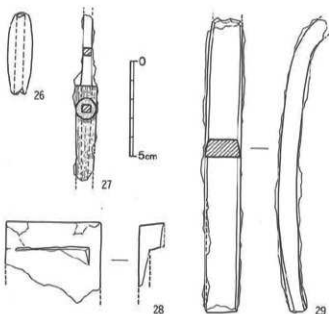
鉄器(図版30、第31図)

鉄箠(27) 土塁の盛土内から出土した切っ先の欠損した鉄箠である。基部には矢柄が遺存している。茎は断面方形を呈する。

第17トレンチ

染付

皿(11) 第1トレンチ、Ⅲ区南北トレンチから出土した彫り皿と同タイプの皿で、小片で復元したため図示した高台径は若干縮小すると思われる。前者の皿は高台部を欠損していたが、高台は内傾し高さは1.0cmを測る。壺付から高台内面は露胎となる。絵柄、胎土、釉調などは前記の染付と同様である。16世紀後半である。



第31図 各トレンチ出土土製品、石製品、鉄器実測図(1/2)

第19トレンチ

土師器

土鍋(12・13) トレンチの7・8層付近から出土した小片である。口縁部は僅かに肥厚する。調整は外面に荒いハケで仕上げる。胎土は砂粒を多く含み、外面は煤が付着する。

青磁

皿(14) 宋代の連弁を有す高台付きの皿の小片であろう。7・8層付近からの出土である。胎土は淡い灰白色で、釉はオリーブ色を呈する。器表面には貫入が認められる。

陶器

鉢(15) トレンチの上層から出土した唐津焼の鉢である。高台部は厚く作られ、高台内面から底部外面にかけてはへうで削り露胎となる。内面はロクロ目が明瞭に観察でき、その上から白化粧土を掛け、一部に黄味色の釉だれがみられる。上面は黄味色の釉が掛けられていたのであろう。胎土は良く淡い茶褐色を呈する。17世紀代に比定される。

第20トレンチ

土師器

皿(16・17) トレンチの北斜面下に落下した状態で出土した。16は所謂特小皿と言われるもので、本丸田区南北トレンチの11-a層から出土した小皿と同タイプである。復原口径5.8cm、底径3.9cm、器高1.7cmを測る。内面に煤が付着しており灯明皿として使用されたものであろう。17は11-b層から出土した皿と同じもので復原口径9.1cm、底径6.1cm、器高2.1cm、を測る。

火鉢(20) 底部の小片である。底部から胴部にかけて屈折させ、屈折部に接する形で高さ2.7cmの脚を貼付する。脚は縦方向に僅かに面取りをする。胎土は精製され赤褐色粒子を含む。焼質は土師質で、二の丸出土の火鉢より小振りであることから風炉の可能性はある。

染付

皿(18・19) 釉調・胎土・文様構成から両者は同一固体と考えられる。器内は薄く口縁部は僅かに外反する。高台は低く畳付部に砂粒が付着し、砂敷きで焼成されたことが分かる。絵柄は口縁部に一条の横線、内側に幾何学文、見込み部には二条の線で区画し、その内部にも染め付ける。胎土は乳白色、釉は混濁白色を呈する。この種の皿は高台内部に「長命富貴」の治款が描かれる。16世紀後半頃に比定される。

石製品(図版30、第31図)

硯(28) 輝緑凝灰岩製の硯で海部が遺存する。形態は長方形を呈し、頭部短辺のみ旧形を保つ。頭部短辺は5.0cmを測る。

第28トレンチ

染付

坏(21) 非常に器壁が薄いもので、やや時代が下る染付の可能性はある。口縁部は僅かに肥厚させ口唇部は劣る。表面には淡い紺色で染め付けるが、何を描いているのかはっきりしない。釉調は淡水色味白色を呈する。

皿(22) 所謂彫り皿で外面にはへうによる縦彫りを入れ隆起帯をつくる。高台は低く内傾し畳付は削り取るにより露胎となり尖る。高台外面に横線を描き、内面見込みに二条の境線がある。底部には判別不可能な図柄を描く。この皿は二次加熱を受け染付の絵柄及び釉もくすみ白灰色に発色する。気孔も数多く見られる。

第30トレンチ

土師器

皿(23) 本丸南北トレンチの11-b層出土の皿と同タイプで、復原口径8.2cm、底径5.7cm器高2.0cmを測る。

染 付

皿(24) 所謂「莨苢底」の皿で胴部から口縁部にかけては内湾気味である。畳付から内面にかけては露胎である。口縁外面には二条の横線を引き線間に列点状に染付ける。外面底部付近には境線を巡らす。口縁内面にも一条、見込みにも境線を引く。境線内は釉を掻き取り露胎となる。この皿は二次加熱を受け染付は黒くくすみ、釉もくすんで灰黄色を呈する。内外面とも貫入が著しい。口径10.9cm、底径3.5cm、器高3.1cmを測る。16世紀後半頃に比定される

鉄製品

不明鉄器(29) トレンチの下層から出土した鋸状の鉄器がある。断面は逆台形状を呈する。両端は欠損しているが、若干曲がりかけた箇所で折れている。厚さは1.0cm、幅は1.9cmを測る。鍛造品である。

大手門址

染 付

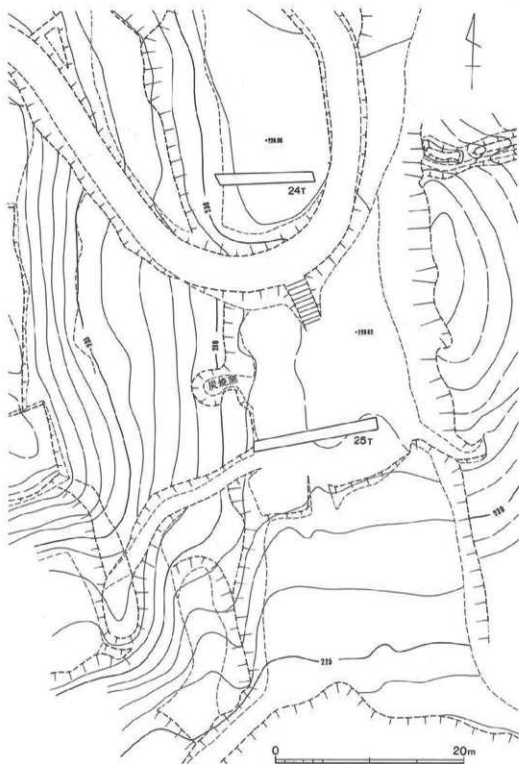
皿(25) 門の礎石の傍から出土した。口縁部は僅かに外反し、口縁内側に二条、見込みに二条の境線を引く。底部には草花文の一部が見える。外面は口縁と底部付近に境線を引き、その間に唐草文を描く。胎土は乳白色で、釉は淡水色味白色を呈し、発色が良い。16世紀前半～中頃までの所産である。

(2) 堀切の調査

前述した様に本丸と三の丸間の堀切は、天正12年の豊後勢の城攻めの直前に掘られたことは本丸の南曲輪の土量から出土した土師器によってある程度証明された。現況での堀切の上幅は約42m、底幅は約15mを測り、本丸からの比高差は約13m弱、三の丸からの比高差は約50m強ある。また、南北の法上までの総延長は約80mを測り、南側は自然地形に繋がり、北側は縦堀に繋がっている。しかも、本丸、三の丸側は急斜面をなしている。本丸側斜面は勾配を利用し近世の炭焼窯が造られている。堀切には2本のトレンチを設定した。

第24トレンチ(図版22-(1)、第32図)

堀切の北側に設定したトレンチである。調査の結果、約20～30cm掘り下げたところで雲母片岩の岩盤を確認したが、トレンチの約1/2が大きく擾乱を受け、中には伐採木が投棄されていた。



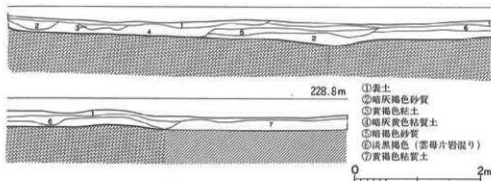
第32図 堀切付近地形図 (1/400)

出土遺物は皆無である。

第25トレンチ（図版22-①、第32・33図）

堀切の南側に設定したトレンチで、現状では松と三桠が植樹されている。トレンチは13mの長さを掘ったが、約30～40cmの深さで地山が現れた。調査前に堀切はかなりの深さを想定していたが、意外に浅く天正12年頃に掘られた割りには堆積層が薄く、当時の状態に近いことが判明した。さらに、図示した様に東側1/4の所で地山が異なり、西側が雲母片岩の岩盤、東側が山土（黄褐色粘質土）の土層が認められた。地山の違いは、本来堀切の部分の自然地形が谷になっており、土質の異なる箇所から三の丸の丘陵に繋がっていたと想定される。だとすれば、堀切の堀削時に三の丸の一部を破壊したことになる。

堀切からはかなりの遺物の出土が期待されたが、あにはからんや出土遺物は皆無であった。



第33図 第25トレンチ土層実測図（1/60）

（3）二の丸址の調査

二の丸址の調査は、第一次・二次の本丸の調査で判明していない館址の規模の確認に眼目を置き、第三次調査として実施した。二の丸は面積的にも小規模であるため、平坦部は中央の堂宇を除き全面発掘に近い状態で第Ⅰ・Ⅱ区に分けて調査した。堂宇周辺は岩盤が露出しており、ここを中心に東・南側以外全て盛土を施し、基本的には本丸と同様の普請をしていた。城普請を調査するため、平坦部盛土部分の第Ⅰ区に東西トレンチを設定し、さらには、西斜面から曲輪にかけて第1・2トレンチ、東南側の馬場と称されている平坦部に第3トレンチ、東側の馬場と二の丸の境に第4トレンチを設定した。

「久留米城古城之覚書」によれば「二ノ丸、長15間、横15間、本丸より45間下にあり」と記されており、前述した様に文献では二の丸の縄張りは正方形を呈することになる。現に北側と西側は約15間を測るが、東と南は食い違っている。聴く所によると東南の平坦部は隠れ馬場と称されているが、公園化する際には削平を受けたことも考えられるため、地元の和田重雄氏に尋ねたところ公園化する際に植樹をし、北側を削平したとの返事が返ってきた。管理道路で一部が破壊されている曲輪を観る限りでは、南側の曲輪が隠れ馬場に繋がっており、大幅な削平を受けているとは言えない。文献では北と南側を指して記録に留めたのかも知れない。

(a) 城普請

I 区東西トレンチ (図版23-(1)、第35図)

調査I区の西側盛土部分に設定したトレンチである。調査の結果、土層図で示した東側は岩盤が露出しており、盛土は西に向かって徐々に厚くなる。盛土は粘質土を多用し、本丸の粘質土と砂質土を交互に客土する方法はとっていない。この点からも、本丸に対してやや簡略な技法で築城していることが分かる。

西側の一段掘り下げた面には、雲母片岩を多く混入させた黄褐色土で面を整えており、部分的に本丸同様炭化物を含む層が看取できる。しかも、旧表土が認められず、かなりの地山整形がなされている様である。

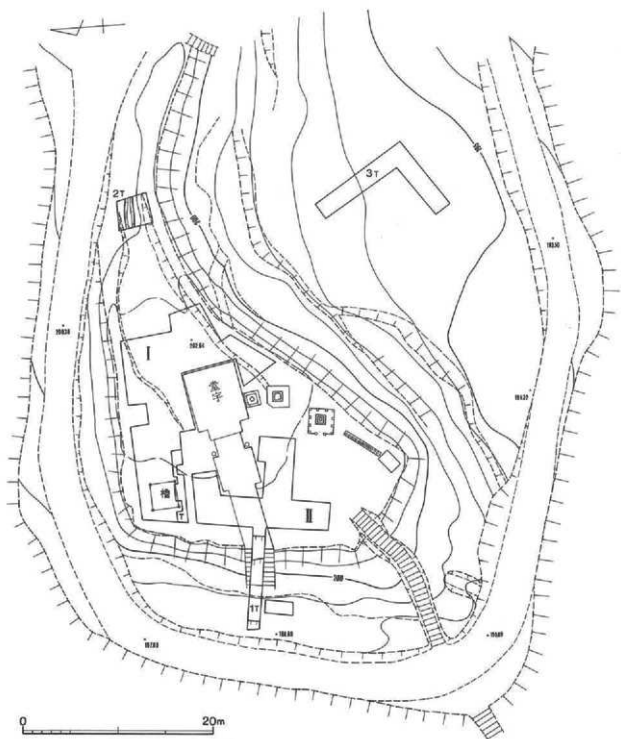
当時の面は2・3層の上面と考えられ、いずれも砂質土からなる。全体的な地山の状態を見ると、調査区の南側には赤褐色の地山がすでに露頭し、盛土は主に北側と西側になる。ちなみに、西側の地山までの深さは0.70mを測る。

トレンチからの遺物は、輪花口縁の染付皿(彫り皿)片が第3層から出土している。

第1トレンチ (図版23-(2)・24-(1)、第35図)

二の丸西斜面の盛土状態、あるいは石垣普請を調査するために設定したトレンチである。この部分は堂宇の参拝のための石段が設置されていた箇所である。当斜面は比較的緩斜面をなし、頂部と曲輪部との比高差は3.0mを測る。

調査の結果、石垣普請は認められず、単なる盛土による築城であることが判明した。土層図で観察する限りでは、第4層が猫尾城当時の表土層と考えられ、上部でのレベルが平坦部のレベルとが同一であることから理解されよう。第4層の上層は後の補修なのか、新しい盛土なのか明確でない。



第34図 二の丸、馬場付近地形図 (1/400)

4層以下は黄褐色土を主体とした粘質土で客土している。地山は、図示したように上部が赤橙色土で下半が片岩質の岩盤であるが、かなりの地山整形を行っているようで、曲輪部分が平坦になる。

曲輪は西側が管理道路となっているため完壊していないが、表土下に4層の流れが観察できることから旧状を保っていると考えられる。

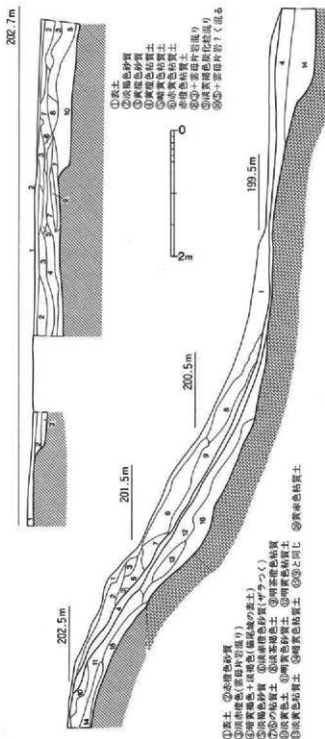
遺物は岩盤直上から土師器の皿が出土している。

(b) 館 址

調査Ⅰ・Ⅱ区(図版24-(2)・25-(1)、第36・37図)

二の丸の調査区は、中央に昭和3年の御大典記念時に建立された堂宇があるため、その周辺を便宜上Ⅰ・Ⅱ区に分けて調査した。標高は202m強を測る。

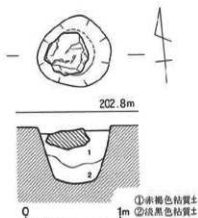
Ⅰ区は堂宇の北及び東に当たりますが、調査の結果、14個のビットと根石らしき川原石を検出した。この内P-8・9・14は昭和期のビットである。P-8からは山石をセメントでまいている。残りのP-1~7・10~13は明確な根拠はないが、P-1



第35図 Ⅰ区東西トレンチ、西斜面トレンチ土層実測図 (1/60)

から火鉢が出土しており、このピットの覆土と上記のピットの覆土の色が酷似していることから、猫尾城の当時の遺構であると考えられる。

検出したP-4は岩盤をくり貫き、その中に淡黒褐色と赤黄褐色の粘質土で地固めをし、山石の礎石を据えている。ピットの規模は径0.75m、深さ0.6mを測る。このピットを中心として北側及び南側にピットが配されている。一見まとまりのある配置とも受け取れるが、東西には延びない。南側は薬師堂如来を祭る堂宇があるため定かではなく、北側は管理道路で削平されており不明である。



第36図 二の丸礎石実測図 (1/40)

P-4の礎石の検出状況から見て、図示した周辺の柱穴は、規模・深さとも小さく、礎石も検出していない。後世礎石が抜かれたことも考えられるが、ピット間の距離に整合性が認められるのはP4-P5、P4-P6で共に3.40mを測る。P-1の傍にある集積は燈籠の根石であり猫尾城とは関係ない。

遺物は前述したP-1から出土した火鉢・土鍋（土師質）の他、その周辺の客土内から染付が出土している。

Ⅱ区は御堂の西側に当る。ここからは4個のピットを検出したが、館址に関係すると考えられる柱穴は検出できていない。しかしP-16内から土師器の皿が出土しており、当時の建物に關係する柱穴であろう。

その他の柱穴からの出土遺物はない。

以上の結果から二の丸の館址は、P-4に関連して管理道路で削平された北側に延びるのか、P-4周辺が最高所出ることから、周辺とのレベルを合わせるためP-4・5を掘り込み、他の柱は礎石のみを使用したのかは明確でなく、二の丸での館址の規模の確認はできていない。

(c) 櫓 址 (図版25-(2)、第38図)

調査Ⅰ区で検出した遺構で、二の丸の北西隅に位置する。調査時点では館址の礎石（根石）と考えていたが、調査が進むにつれて関連する根石が検出されず、単独の建物で「櫓址」と判断した。

二の丸の櫓址の存在は文献にも記載されておらず、古老への聞き取り調査及び地元の和田重雄氏に尋ねたが、その様な痕跡は確認していないとの返事が返ってきた。二の丸でのこの位置は眺望の聞く場所で、櫓が設置されても何ら疑問のない場所である。

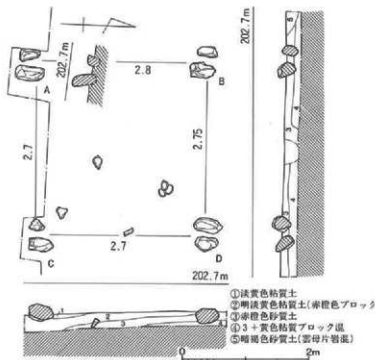
櫓はほぼ東西-南北方向に建てられており、礎石は除去されてはいるものの、根石は2個一



第37図 二の九遺構配置図 (1/80)

対でしかも同一方向に置かれ、北西側の一個を除くとして川原石を使用している。規模は、A-B間が2.80m、A-C間が2.70m、B-D間が2.75m、C-D間が2.70mを測り、柱間に規則性を持たせている。おそらく根石の上に板石の礎石を置き、丸太を使用した簡易な櫓であったと推測される。

土層図で見ると、根石は盛土の中に直接埋め込まれ、堀方などの痕跡はない。根石のレベルは、若干の高低差はあるもののほぼ同レベルにある。Aの根石は後世動かされたのか立った状態で出土している。



第38図 I区遺構実測図 (1/60)

また、櫓の枠内の盛土中から円形の焼痕が認められた。城普請の最中に火を焚いた跡であろう。

遺物は盛土内（3層）から出土しており、器種は染付の皿・碗・甌がある。

第2トレンチ (第34図)

調査地点は、馬場と二の丸に繋がる部分で、当初通路の検出を目的に設定したトレンチである。調査の結果、東西に走る幅0.80mの「U」字の溝状遺構を検出したが、断面観察では凹凸が激しく、本丸の曲輪で検出した通路とは若干様相を異にしており後世の水流による浸蝕と判断した。

出土遺物はない。

第3トレンチ (第34図)

隠れ馬場と称されている平坦部のトレンチであるが、遺構、遺物は検出されなかった。

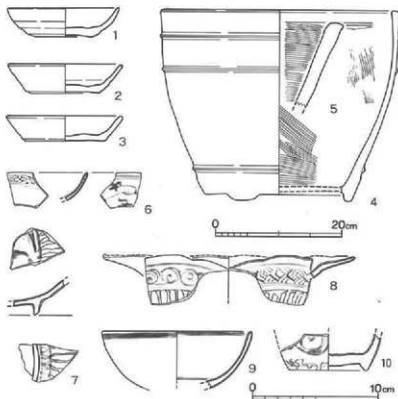
(d) 出土遺物

第1トレンチ出土遺物 (図版33図、第39図)

土器器

皿(1・2) 1は16層からの出土で、口径に対して底径が小さい。胴部から口縁部はやや丸みを持つ。本九田区南北トレンチの11-a層から出土した皿と同タイプである。口径8.7cm、底径4.4cm、器高2.25cmを測る。2は15層から出土した。タイプとしては上記の11-b層からの出土と同一であるが、出土層位で見ると時期差は認められない。口径8.8cm、底径5.2cm、器高2.4cmを測る。両者とも糸切り底である。

調査Ⅰ・Ⅱ区出土遺物 (図版33・34、第38図)



第39図 二の九出土遺物 (1/3)

土師器

皿(3) II区のP-16内から出土した。2の皿と同タイプのものであるが、やや器高が低い。口径9.2cm、底径6.3cm、器高2.0cmを測る。

火鉢(4) P-1の覆土中に投棄された状態で出土した焼質の悪い瓦質土器。約1/3残存しており復原実測である。口縁部は直に上部に延び、口唇部は肥厚する。口縁下から胴部上半には2条の低い台形状の凸帯を貼付する。胴は殆ど張らず、下半にも1条の凸帯を巡らす。底部には低い3脚をつける。調整は内面がハケ、外面は摩耗しているが、ナデであろう。色調は淡黄褐色を呈し焼疵は殆ど認められない。復原口径35.7cm、底径23.0cm、器高29.9cmを測る。

土鍋(5) P-1から出土した小片である。口唇部を僅かに肥厚させる。調整は内面がカキ目状、外面が粗いハケで仕上げる。外面には厚く煤が付着する。

染付

皿(5・7・8) すべて槽付近の埋土中から出土した。6は口縁内面に幾何学文、外面口唇部に2条の施文、胴部には唐草文を配する。胎土は混濁白色、釉調は乳白色を呈し発色はよい。7・8は彫り皿で同タイプの皿である。7は内傾する高台部を有し、疊付は釉を削り取り露胎となり尖る。高台の外面には幾何学文を配する。見込み部には境線を巡らし、内側に草花文を描く。胎土は混入物が多く、灰白色を呈する。地釉は部分的に釉だまりとなり淡水色味乳白色に発色する。8は輪花口縁を有し、胴部から口縁部にかけては屈折し口広となる。口縁内部には1条の横線を施文し、直下には上下に境線を引きその間に幾何学状文を描く。外面は1条の施文、下には不揃いの渦文を配する。胴部にはへらによる縦方向の彫りを付け隆起帯をなす。胎土は7と酷似するが、二次加熱を受け絵柄・釉ともくすんでいる。

碗(9) 盛土中より出土した破片である。内外口縁部には幅広の横線を描き、見込みにも境線を巡らす。底部内面は釉の掻き取りにより露胎となる。二次加熱のためか器表面には粗い貫入が見られ、絵柄・釉ともくすむ。

瓶(10) 底部片で槽下の3層埋土中から出土した。高台内部と疊付は丁寧に面取りをし、高台外面から底部にかけては釉のイッチン掛けのため露胎となる。外面高台部および器表面には境線と不明瞭な絵柄が見えるが、釉掛けのない部分の呉須は発色しておらず黒く変色する。内面は白色の化粧土が塗布され黄白色に鈍く発色する。器表面は二次加熱のため絵柄・釉ともくすみ青灰色に変色し貫入が認められる。胎土は僅かに陶土を混入させたためかくすんだ灰色を呈する。

染付類はすべて16世紀後半頃に比定されよう。

(4) 縦堀・土塁の調査 (図版26-(1)・(2)、第40図)

この部分の縦堀・土塁は早くから周知されていた。現況での総延長は約69m、幅11m(標高195m-164m)を測るが、二の丸址の南西端に先端部の痕跡が残っており、管理道路で一部寸断されている。

縦堀と土塁は地形図で示す様に両端に堀を掘り、中央に土塁を形成している。右側の堀は断面「L」字状を呈しており、堀というよりも登城道の可能性があるが、標高164m付近で途切れており、急傾斜をなすためやや疑問が残る。

トレンチは標高192m付近に設定したが、東側は私有地(竹林)のため調査から除外した。土層

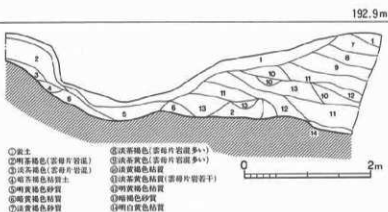
断面で見ると、5層の砂質土は後世の埋積土と考えられる。地山は整形され、2層も人工的な盛土である。東側の土塁は、粘質土・砂質土・雲母片岩混入土を交互に盛り上げ構築

するが、盛土が地形に沿って傾斜する。土塁の東斜面は急傾斜をなしているが崩壊していない。かなり堅固な造りのようである。ちなみに地山からの高さは1.50m前後である。

出土遺物はない。

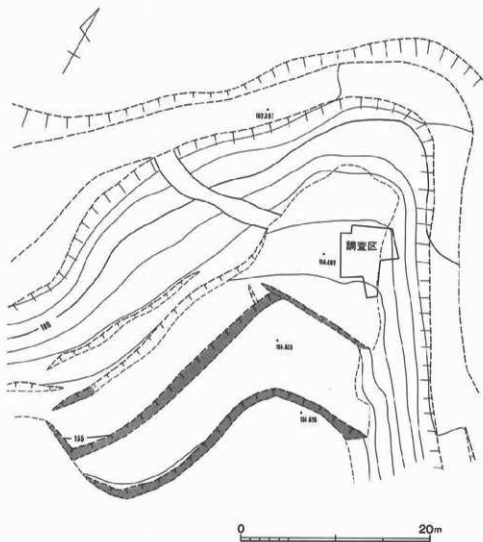


第40図 二の丸南西縦堀、土塁周辺地形図 (1/1,000)



第41図 縦堀、土塁土層実測図 (1/60)

(5) 水郭の調査



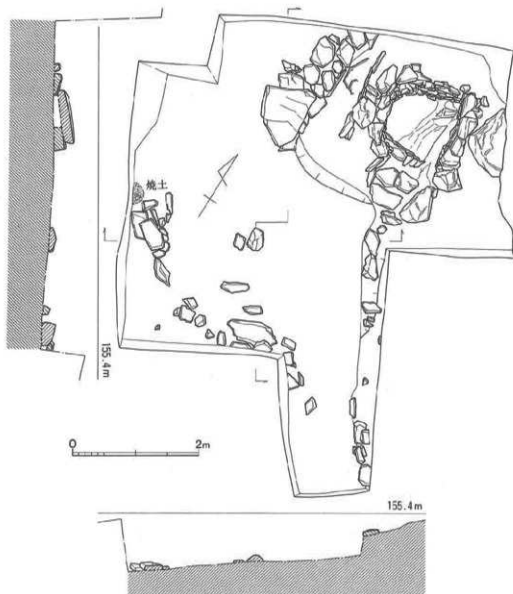
第42図 井戸址周辺地形図 (1/400)

(a) 井戸址 (図版27-(1)・(2)、第42～45図)

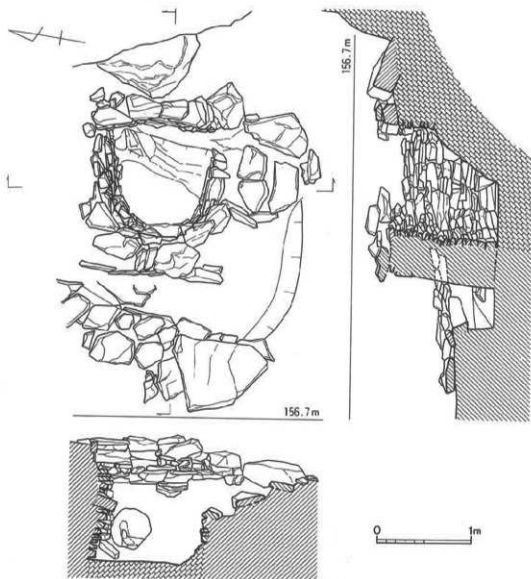
井戸については、第2次調査の段階で地権者及び地元の古老から、猫山の中腹に通称『殿様

の井戸」が存在したと云う事実が知らされた。第3次が最終年度であることから、再度、地権者に会い正確な場所を聞き、猫山の標高160m付近の谷部の調査に取りかかった。

この付近は猫山の南斜面に数ある谷の一つで、現在桧が植樹されている。周りには数段の石垣が築かれ、後世畑地として利用されていた。井戸は昭和40年代頃には地表面に露出していたらしいが、谷を横切る農道が建設された時点で埋没したらしい。



第43図 井戸址と配石遺構実測図 (1/60)



第44図 井戸址実測図 (1/40)

調査は谷の平坦部の一角にトレンチを設定し、井戸の確認作業に取りかかったが、掘り進んでいく内に緑泥片岩と雲母片岩の板石が配石された様な状態で出土した。また、調査区の東には石列が出土し、これに沿って北側に拡張した。その結果、堆積層が粘土と砂混じりの層となり、北端で井戸の輪郭を確認した。

井戸は北端の雲母片岩の岩盤沿いに造られており、東側の岩盤を一部テラス状に整形し、その上に緑泥片岩と雲母片岩の板石を平・小口積みになっていた。ここを起点として積み石は弧を

描き、平面形状が蒲鉾形を呈している。北側の岩盤も一部削り、積み石を安定させている。

南側には3段の石段を設け取水し易くする。石段は南側の石列に繋がり、井戸に通じる小道の在ったことが分かる。水口は岩盤の割れめからの湧水を利用していた。井戸の規模は0.90m×1.10m、深さ1.20m前後を測る。しかし調査の結果、井戸内からは猫尾城当時の遺物の出土はなく、昭和期の湯呑みが一個出土したに過ぎない。

以上の結果から、調査区を西側に拡張すると同時に下層に掘り下げたところ、検出した井戸よりも更に0.6m下層から一段と規模の大きい片岩を利用した石組を検出した。石組は2段に組まれ、深さ0.30mの索張り穴の上面で石畳状に組んでいる。しかも、北から南に向かって若干弧を描く様に築かれ、南西側で完結する。石組の先端は大振りの片岩を使用し、南側は掘方のみで索張り状になる。石組の傍には取水のための踏石が置かれている。北側は陰が植樹されており、しかも地権者の要望で新しい井戸は残すことになり、下層で検出した井戸の全容は知り得なかった。井戸内は灰褐色の土壌で埋まっていたが、出土遺物はない。

井戸の石組みの面は黄褐色の砂質層（地山ではない）からなり、同一レベルで周辺の板石が検出された。板石は井戸を意識したかの様に弧状に配されており、井戸と関連する遺構とも考えられる。板石の傍からは焼土が検出され、その近くからは土鍋（破片）が出土した。

土層の堆積状況を見ると、上流からの土砂の流失で厚く堆積しているが、配石遺構の面は最下層の面で、現地表面から1.70m下層から出土している。

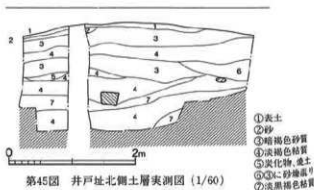
以上の結果から、当該地はもともと古く

から周知された猫山の湧水地であり、上限時期は定かでないが、猫尾城当時の日常の水源地（水郭）として機能していた可能性が指摘でき、土鍋の出土が裏付け証拠として挙げられよう。猫尾城が落城した後も井戸はある時期まで引き継がれたが自然に廃れ、後に縮小化し再構築され現在に至ったと推察される。

（b）出土遺物

土師器

土鍋 口縁部を僅かに外反する。二次加熱を受け変色し、外面煤が付着する。内面はハケ。



第45図 井戸址北側土層実測図 (1/60)



第46図 井戸周辺出土遺物 (1/3)

IV おわりに

猫尾城は、県内の数ある中世山城の中でも屈指の山城と云われている。本丸に石垣を巡らす勇壮さもあることから、当時の城の縄張り・旧状を色濃く残し比類を見ない類稀な山城と云えよう。とりわけ、難攻不落と謳われた猫尾城〔調城〕は南に矢部川、北に笠原川を眼下に置き、地の利を生かした所謂「自然の要塞」を彷彿させてくれる。

けだし、当時卓越した防御を誇った難攻不落の城も時代の趨勢には勝てず、味方の変心から天正12年7月豊後大友の軍勢に敗退し、斜陽の一途を辿ることになる。後に元和元年(1615)家康の「破却令」により廃墟と化した。流世の興亡の縮図を垣間見た様な気がしてならない。

さて、猫尾城の栄枯盛衰は「V 猫尾城由来」の項に譲るとして、数少ない文献にも詳述されておらず、また現在のところ古絵図も無い状況下での調査であったが、この項では調査に基づいて判明した事実について若干述べてみたい。

猫尾城の由来については、明確な記述は無いものの、黒木一族の系図に「猫尾城の初代城主は、平安末期まで大隅国細路の領主であった細路藏人源助能で云々・」とあり、源助能が猫尾城に拠を構えたのは平安末から鎌倉初期頃とされている。しかし、和田重雄氏も「V章」で指摘されてるように、細路藏人源助能が薩州の大根占いから筑後国黒木郷に移ったとされる古記録はない。

この点からも猫尾城の起源が一つの問題提起となり、文献史料と考古学資料との整合性を検討する必要がある。城普請（築城技法）の調査で築城工程と出土遺物を検証し、猫尾城の上限時期を探ることにした。

城普請（本丸址）の調査は、第1トレンチ、調査Ⅱ・Ⅲ区のトレンチ調査で一度把握できた。つまり、猫尾城の基本的な築城技法は、(1) まず山を円錐台形状に削平する。(2) 次に斜面を地山整形すると同時に、腰曲輪を削り出し平坦部を形成する。(3) 次に地形に沿ってある程度盛土を施し面を整えた後、片岩で石垣普請を行う。この過程で火を囲みながら飲食したらしく、焼痕の周りに土師器の皿が散乱していた。この普請で面積的には2倍以上の面が確保される。(4) 次に本丸の高所部分の普請は盛土をしながら内外側面の石垣を組み、土塁と同時に構築する。以上が本丸の築城工程であるが、この間に数度の補修を行っていることは云うに及ばない。また、盛土内から顕著な焼土・炭化物の堆積層は認められず、焼討をかけられた否かは疑問視される。

出土遺物については、Ⅱ時期の遺物が出土している。まず最古の時期（Ⅰ期）は土師器の皿（24図1-5）・坏（27図7-11、14-17）・播鉢（24図26）・土鍋（24図27）、白磁の碗（24図9、27図23）・皿=柙府磁（24図8）がある。柙府磁は全国的に見ても出土例が少なく、9遺跡目

となる。これらの遺物は本丸の盛土の最下層から出土したもので、南側第1トレンチとⅢ区南北トレンチ最下層出土の一群が時期的に符号する。

土師器の皿・坏は、太宰府推定金光寺跡第Ⅱ期整地層出土土師器の法量とほぼ一致し、枢府磁が共伴することも共通する。(註1)。枢府磁の焼造は14世紀前半頃との指摘があり、(註2)、この種の器種は伝世されることを考え合わせても14世紀中～後半に位置付けることができる。

Ⅱ期は第11トレンチから出土した14世紀末～15世紀中頃に比定できる明の青磁碗(30図5)がある。土師器は太宰府出土の坏bに分類された器種で(註3)、第16トレンチ出土の坏(30図10)が相当する。15世紀後半代に比定した方がよからう。

Ⅲ期は大手門址から出土した(30図25)の染付の皿がある。16世紀前半～中頃に比定される。土師器は本丸Ⅲ区南北トレンチ11-a出土の特小皿・皿が共伴しても疑問の余地はないが、Ⅳ期の染付と共存することからここでは除外する。

Ⅳ期は出土遺物としては最も多い。本丸第1トレンチ中間層・Ⅲ区南北トレンチ11-a層出土の染付が16世紀後半に比定される。この染付群に上記の特小皿(27図2)、皿(27図3・4)が共存する。

V期としては第5トレンチ出土の皿(30図1)が16世紀後半～17世紀初頭のもので、他に17世紀代の唐津焼きの鉢(30図15)がある。その他Ⅵ期として第13トレンチから肥前産のタコ唐草文を記した徳利(不掲載)の細片が出土しており、Ⅱ区の瓦とともに江戸後半頃の所産である。

二の丸に於ける出土遺物は14世紀代の皿(2・3)、火鉢(4)と15～16世紀代の土師器の皿(1)、16世紀後半の染付があり本丸と同時期の遺物が採集された。

以上の結果から、猫尾城築城の上限期は遡っても14世紀中頃(南北朝)に位置付けられ、元和元(1615)の「一国一城令」により廃墟となるまでの間約250～260年の歳月が流れたのである。この間、数度にわたって城普請がなされたと考えられるが、調査で検証し得たのは14世紀中頃から後半にかけてと16世紀後半頃と推測される。

館址については、『筑後将士軍談』に「前略・・・本丸の周りに長屋跡石垣今なお存す。櫓三つあり、その台いまなお存す。云々・・・」とある。地元の和田重雄氏から聞いた話では、猫尾城が黒木公園として整備され管理道路を建設した際に萱の根を重機で除去した。その時約15cmほど掘削したとのことであった。トレンチ調査での上層の整地層はこの時の結果であろう。前述したように本丸での館址は検出できておらず、大半の礎石(川原石)は除去されていた。(第30トレンチ参照)。これが「破却令」の時なのか、後世の削平によるものなのか定かでない。しかし、第1トレンチで出土した板石も礎石として使用された可能性もある。

また、和田氏の話では管理道路建設の折、掘手門から三の丸に通じる道が破壊されたらしい。道は高さ1.5m、幅1.5m前後で、一見土塁状に築かれ、両端は板石を立ててその間に板石を敷

いていたとのことであった。

さらに、昭和46年に現在の英彦山権現を祭る御堂の床下から北宋銭約15kgが掘り出されたとの話も聞かされた。現在その所在は不明であり、埋納の方法は分かっていない。これより以前昭和37年4月には、黒木町北木屋野付在住の石崎幸男氏が野田山でみかん畑を開墾中、古備前焼の三耳壺に入った古銭を発見した。古銭の総量は約30kgを測り、種類は10種類を数える。

この内、太平通寶・至道元寶・祥符元寶・天禧通寶・天聖元寶・景祐元寶・元祐通寶・聖宗元寶は北宋銭で初鋳年が976年から1101年、洪武通寶・永樂通寶は明銭で初鋳年が1368～98年、1408年で、10種類の古銭は平安時代前半～室町時代前半頃（初鋳年に並年）と年代幅がある。

この中で9の洪武通寶を除くすべての古銭に手擦れ痕が認められ、当時かなり使用され流通したものが埋納されたと推測される。これに対して洪武通寶は鋳造され殆ど使われないままに輸入され、そのまま埋められた可能性がある。しかし、最も新しい永樂通寶は手擦れ痕があり、埋納された年代は永樂通寶が伴うことから早く見積もっても15世紀前半以降と云うことになる。

本丸から出土した15kgの北宋銭（銭種は不明）は北宋銭のみであればやや時代は遡ろう。本丸及び野田山から発見された上記の古銭は、猫尾城が築城された時期に符号するかそれに近似した時期となる。となると、これらの古銭は猫尾城に関係する埋金と考えることも可能である。

猫尾城の起源は一説では平安末期頃とされている。『黒木軍記』によると「助能元祖は薩州おかねちめの城主也、子細あって黒木猫尾の城山別当をせめたいらげ助能城主と成此戦二年三月の合戦也」と記されており、和田氏は助能が城主に君臨したのを仁安2年（1167）頃と位置付けた。しかし、調査結果では平安時代まで遡る遺物は出土していない。例え平安時代末に城が存在したとしても小規模な山城であつたろうし、後の幾度となく繰り返された城普請で、当時の遺物は雲散霧消と化したであろう。

猫尾城は緊急時の城である。城の麓にはいまでも陣ノ内の字名が残る。現在黒木中学校が建てられているが、建設当時かなりの量の遺物が出土したと聞く。字名の如く黒木氏の居館が存在した場所と考えられており、黒木氏は居館に常駐し情勢が逼迫した折に猫尾城に籠ったと推察される。居館の調査がなされれば黒木氏のより詳細な内容が語れるものと思うが、今となっては誠に残念でならない。

なお、土師器については九州歴史資料館の横田健二郎氏、染付については九州陶磁文化館の大橋康二氏、古銭については九州歴史資料館の倉住靖彦氏から有益なる助言を得た。

註1 九州歴史資料館「太宰府史跡」－昭和55年度発掘調査概報－昭和56年3月

註2 森田 勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」－貿易陶磁研究No.2－1982

註3 註1に同じ

V 文献からみた猫尾城（抄）

— 黒木氏の出自 —

和田重雄

1) 鹿兒島県肝付郡大根占町の古文書

黒木町内に古記録（文献）として現存する墨書和本が六種類ある。うちの四種が、「黒木氏は大隅国彌寝（おじめ・根占）から来た」とある。

昭和49年（1974）鹿兒島県肝付郡大根占町から、大根占町史編纂委員が米町されて猫尾城と黒木氏の調査・研究が行われた。黒木町からは昭和51年と昭和63年の二回、現地の大根占町に調査・研究に行った。「去るものは疎し」のことばどおり、黒木氏の初代・彌寝藏人源助能が大根占の高城から筑後国黒木郷に移ったとする古記録はない。

大根占町に関する最古で唯一の第一級史料（彌寝文書——九州史料刊行会編・九大名誉教授川添昭二氏等編）に、治暦5年（1069）大隅国在庁藤原頼光は、大隅国内の先祖相伝の所領を弟妹子女に譲り与えている。その所領配分案帳文がある。子頼経が彌寝の高城主であったことまでは史料で分かる。その後どうなったか不明である。

不明の約90年後、藤原鎌足を祖とする富山義光が仁安1年（1166）島津庄の庄官から弁済使（平安時代から国衛領および荘園領主の一円支配でない土地に置かれた役人）となって大根占の高城主となっている。富山義光が大隅院の弁済使（島津庄の寄部）になるまでの間、どのように変りだれによって領知されていたのか記録はない。

この90年間の領主が黒木氏と推考される。黒木一族の系図の中に「猫尾城の初代は彌寝藏人源助能といい、平安末期まで大隅国彌寝の領主で、助能は源高能五代の後裔」とある。

また別の記録に「治承（1177）中隅州彌寝の主、黒木朝臣助能河上神社（根占町・旧県社）を再興し奉りしとかや」とある古文書を昭和30年ごろ大根占町に送られたとある。黒木氏の氏神津江宮（旧郷社）の元神官で熊本市在住の某氏宅を訪れ調査したがわからなかった。以上は大根占町の文献で、次に黒木町内および各種の文献を見てみることにしよう。

2) 町内の古記録

(1) 黒木・津江宮由来

「当社開基の初は人皇八十代高倉院の御宇、嘉応元己丑年豊州津江郷の鎮守津江大権現を勧請の社にて御座候、願主は黒木猫尾城主大藏大輔源助能なり、助能公元来大隅国根占の城主にて御座候」

(2) 調城古談

「抑南筑州上妻の郷黒木川内木屋村に一ツの城あり、號けて猫の尾の城と云ふ。古昔の城主を黒木大輔源助能と申しけり」

(3) 黒木軍記(猫尾の城の由来閉書)

「古人語り曰く筑後国上妻郡黒木北川内木屋村に一城を構へ猫尾の城と名付城主黒木殿とて古来よりあり来候処に元暦文治の比城主黒木太夫源助能と申す」

(4) 猫尾城由来

「筑後上妻郡黒木河内木屋村ニ老ツの城有り名付て猫尾の城と云、古来城主を黒木殿と云、元暦文治の比の城主を黒木大藏大輔源助能と申」

(5) 新撰黒木夜話

「抑上妻郡北木屋邑ニ属シテ古城跡アリ是ヲ猫尾城ト称ス其由来ヲ委ク尋レバ元暦文治ノ比ノ城主ヲ黒木大藏大輔源助能ト云リ、薩島嶋津氏ノ支流ニシテ根占ト云処ヨリ来テ(郷間ニ或ハは根占蔵ト云)采地千町余ヲ領シテ城主ト成」

3) 既存の史誌より

(1) 筑後国史・筑後将士軍談 中巻

「黒木由来記云、黒木河内木屋村猫尾城其起源詳ナラズ、薩州根智目城主某、大軍ヲ卒シテ来攻ル事二年余、遂ニ猫尾ノ城ヲ拔テ是ニ居ル、黒木大藏大輔源助能ト云」

※ 町内木屋氏(黒木一族)宅の「黒木軍記」に、此助能元祖は薩州おかねちめの城主也、子細あって黒木猫尾の城山別当をせめたいらげ助能城主と成此戦二年三月の合戦也」とある。

(2) 筑後地鑑

「黒木郷木屋村猫尾ノ城ハ、大蔵大輔源助能ノ居城ナリ。常居ノ館ハ、城山ノ麓ニ在リ。陣ノ内ト曰フ。」

(3) 校訂・筑後志

「猫尾の城址、上妻郡北木屋村にあり。黒木大蔵大輔・調助能景代の居城なり。助能は本と薩州の産なり宣命に依りて、文治年中、此城を築きて遷住す。」

(4) 筑後名鑑・八女郡全史

「東鑑・建久九年（一一九八）正月薩摩多田蔵人行綱の子大蔵大輔祐能、右大將源頼朝の命を受け黒木郷に城を築き城主となり附近二十一村を領す是木屋村の猫尾城なり。」

その他、(5) 久留米領古城之書付、(6) 筑後秘鑑、(7) 寛延記、(8) 稿本八女郡史等がありますが、大同小異につき不記としました。

4) 山門郡瀬高庄と助能

源助能は清和源氏の支族・京都御所の警護北面の武士源高能の5代目といわれている。京都在住のため公卿と接し、特に徳太寺家の信頼を得た家系である。この関係は木屋道隆（黒木一族・柳川藩医）に至まで続いている。

瀬高庄の名は仁平2年（1152）12月20日の「鳥羽院庁下文（吉田文書・平安遺文の2774）に見えるのが初めてである。その文書は、鳥羽院庁別当権大納言藤原朝臣以下五名の院司が、瀬高庄司などに下したもので内容は前の下司（身分の低い官人または事務をとるもの）を他の下司と替えたところ、前の下司は領主の命令にしたがわず、年貢を納めないなどの乱行がわかった。このことを戒めて「御年貢運上」のことを命じたものである。

また、後鳥羽院庁下文（筑後廣尾神社文書1号）寿永元年（1182）8月16日、徳大寺領瀬高庄とある。徳大寺俊忠雄藏卿（実定の祖父）は保安2年（1121）6月太宰府庁の大式に任じられ、保安4年（1123）7月9日太宰権師として死去した。律令制度が乱れるに乗じて、土地を横領・私有する者がでた。俊忠の領地瀬高庄は外祖母に移り、大治6年（1132）上庄・下庄に分かれる。仁安年中（1166）上下の庄が境界線で争論し乱れた。よって実定の父公能（右大將家）は、庁の命により預かる。公能は保安2年（1161）8月死去する。実定は瀬高庄を相続し領家となる。次に実定の手を経て祖母待賢門院（藤原璋子）に寄進される。璋子の母は藤原光

子で、鳥羽天皇の皇后である。天治4年（1124）待賢門院の院号を与えられる。後に家僕の横達が下司となる。

このような不安定な領有権を確保し知行していくために、細寂藏人源助能に命じ、矢部川の上流地、黒木荘（竹内理三著その他に記載されているが、領有者は不明。夜部山（矢部村）は安楽寺領である）に移し下流にある瀬高荘を管理させたのである。天正12年（1584）7月3日、猫尾城主黒木兵庫頭家永が家臣・馬渡将監（木屋氏）、室園主計（上陽町・小川氏）らに「瀬高下荘之内老町三池郡今福之内老町合而武町預進之候、可有知行候、恐々謹言、天正十二年七月三日」とある。

瀬高町史に、昔、瀬高が徳大寺藤原定実の荘園であった頃、住吉館が設けられた。嘉応2年（1170）道因法師のすめによって住吉館で歌合わせの催しがあった。そのときの定実の歌に「ふりにける松ものいはば聞いてまし、昔もかくや住の江の月」というのが残っている。住吉神社の境内付近は館のあとであろう。庄の池辺に記念碑がある。定実が瀬高荘に来たことも、耳納山に来たこと（黒木物語）も伝説である。

5) 政治亡命説

この説は九大名誉教授川添昭二氏の説。他の2名の教授からのまた聞きで川添氏に直接会って確認したいと思っている。太宰府政庁から黒木に亡命されたとする裏付けの史料はない。ただ太田亮氏の大著『姓氏家系大辞典』の調に「調朝臣（つきあそん）、筑後の調氏にして一族栄ゆ。その自出に関しては、或いは安倍姓といい、或いは清和源氏と伝へ、又薩摩より移るなどと云えども、古代調氏の裔なるや著しからん」とある。調氏は古代人名辞典に35名が記してある。

文治2年（1186）助能は京都御所警護の大番役となり上洛した。後白河法皇・後鳥羽天皇の御催しの管弦楽に、笛の役になり全体のリーダーを果たし成功した。これにより「調」の姓を賜ったとある。これを亡命説では本性をかくして「黒木」と名のっていたが今日からは旧姓の「調」を称するがよいと許可されたとある。助能には3男1女があった。

— 猫 尾 城 由 来 —

佐々木四十臣

猫尾城の由来をたどれば平安時代末期までさかのぼれそうで、『黒木軍記』や『調城古談』などには、「(前略)、黒木河内別当とも寄合ひ、山別当の中には器量の人を選び黒木殿と号し、一城を構え猫尾の城名づけて取り立て候云々・・・」とある。

黒木町文化財専門委員会の和田重雄会長の精力的な調査によって、黒木氏の祖・源助能の黒木郷への移住を仁安2年(1167)であろうと推考されるに至ったことは、大きな成果であり、そのへんに関しては、別項に詳述して頂けるといい本項では割愛するが、『猫尾城由来聞書』では、薩州根占の城主・源助能が子細あって黒木猫尾の城の山別当を、2年3か月の戦いによって攻め平らげて城主となったと云う。

源助能が猫尾の城を攻めたのは宣命、あるいは源頼朝の命によってとも云われる。文治2年(1168)助能が大番詰めのため在京してから帰国までの、待宵小侍従にまつわる話は良く知られているところであるが、このおりに調(しらべ)姓を賜ったと云う。

助能には3人の男子が、長男は大尾城主として川崎氏を名のり、次男は星野城主として星野氏を名のり、3男の四郎定善が猫尾城主と名のって黒木姓を引き継いだ。

さて南北朝時代には、黒木氏が一貫して南朝の旗下として活躍したことは、数多くの古文書によって確認されるし、猫尾城は南朝方にとっては最も有力な拠点の一つであった。

四郎定善により連絡として15代続いた黒木氏ではあるが、戦国時代に入ってから情勢は一変し、豊後の大友氏、薩摩の島津氏、肥前の龍造寺氏が三つどもえで覇を競う中で、激しく時代の奔流にもまれていくことになる。

黒木氏16代は兵庫頭家永で、豊後大友の旗下であったが、天正時代のはじめごろになると肥前の龍造寺氏からの働きかけが強まり、天正六年(1578)日向耳川(現宮崎県児湯郡)の合戦で、大友氏が島津氏に大敗してからは、その動きは一段と活発になり、筑後一帯は一時期は全てが龍造寺氏の勢力下に降った。

天正7年8月、龍造寺隆信に攻められた猫尾城主・黒木家永は嫡子四郎を人質に出して降伏(『北肥戦誌』)。もちろん筑後の最前線まで大友氏の支援が及ばなくなったことは事実で、『藤山里正景誌』には、「(前略)大友家へ助けの兵を求めるといえども、この時豊後にも軍役ありて助兵の旨なかりしに云々・・・」とある。けれどこのような状況が事実であったろう。

大友氏も黒木氏に対して、戸次宗利を入聲として派遣するなどの策を講じたが、家永はこの

申し出を断ったり、あるいはまた同族の川崎氏との間で内紛からついには合戦（渡瀬の合戦）を引き起こすなどが誘因となって、ついに大友氏から攻められるに至った。

豊後からは志賀道雪を大将に派遣して猫尾城を攻めたが、城内からは吊り堀を切り落としたり逆茂木を設けたり、あるいは大石を落したり煎砂を撒いたりして激しく抵抗し寄せ手を防いだ。この時には龍造寺氏からの援兵も加勢して城を守っており、多久長門・成富十右衛門などの名将が伝えられている。

攻めあぐんだ豊後勢ではあったが、猛将・誓将聞こえ高い戸次道雪と高橋紹運の両将の援助を得て、2万余騎をもって猫尾城と矢部川を挟んで向かい合う峯切畑に陣を敷き、形勢が逆転するに至った。時に天正12年（1584）7月のことという。

猫尾城の本丸と三の丸の間の空堀は、この時に豊後勢を防ぐために掘られたもので、寄せ手は三の丸口の野田山方面（本丸東方）と、大手口へ向かって南面から激しく攻め上がったと想像される。

敵が本丸の堀にてをつけるのを見計らって、城内からは弩（いしゆみ）をはずし煎砂を撒きかけた。頃合を見て龍城兵は一挙に撃って出て、敵を川まで追い落として戦い、そのために川の水が血に染まること数日に及ぶとも言う。（『調城古談』）

結局は豊後方の謀略が功を奏して、黒木方に心変わりする者が出て豊後勢を城中に率いれたことから、さしもの堅塁を誇った猫尾城もあえなく落城に至った。

城主・黒木家永は自刃し、自分の3番目の娘（13歳）に介錯させた『秀包記』という。落城は天正12年9月5日の早朝であった。落城後は大友氏の将である田北紹哲が守ったが、天正15年（1587）の豊臣秀吉による島津征伐に際しては、黒木四郎延実（落城時は、人質として肥前にいた）も先導の役を務め、九州平定後の新しい国割には小早川隆景の支えもあって、旧領安堵に一縷の望をかけたが、天正12年にすでに落城していたことや、大友氏に滅ぼされたことが原因で聞き入れられなかった。

その後、延実は小早川隆景に仕えることになり、上妻郡筑紫広門が所領することとなった。陣の内の館は筑紫広門も利用し、慶長5年（1600）関ヶ原合戦の功により、筑後一国の領主となった田中吉政は、家臣の辻勘兵衛を陣の内に居館させた（『久留米城古城之覚書』）という。

元和元年（1615）6月、大坂夏の陣の戦いで、豊臣氏を滅ぼした徳川家康は、大名統制・徳川家安泰のため「一国（藩）一城令」をだした。数日間て四百の城（西国に多い）が破却されたと、宣教師の日記にある。そのとき奉行口分田甚左衛門により里城（現・黒木中学校＝100m四方、城主・重臣の居館）と猫尾城と破却され、里城跡は畑となった。

寛永8年（1631）久留米城掘普請のとき、陣の内にあった切石は城壁石に利用された。

現在、猫尾城の石垣をはじめとする遺構は、戦国時代にかけて段々と堅固に整備されたもので、中世山城址としてこれほどよく残っている例は少ない。

ちなみに『筑後将士軍談』には備尾城の規模について、「山城なり、本丸西面、南北三十間、東西十五間、麓より本丸まで五町三十八間、周りに長屋跡石垣いまなお存す。櫓三つあり、その台いまなお存す。二ノ丸は西にあり、この中間に馬場あり、五十間ばかりなり。東に下りて三ノ丸あり、その間にカラ堀あり云々・・・」と記述されている。

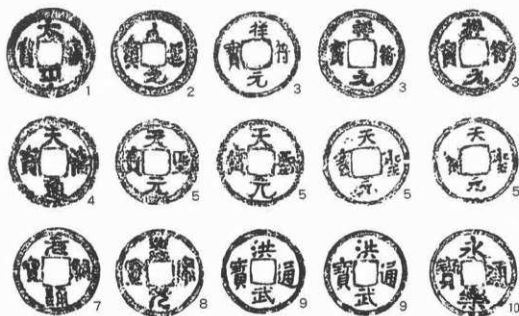
また『久留米城古城之覚書』には、「本丸、長三十間、横十五間、大手口南向。二ノ丸、長十五間、横十五間、本丸より四十五間下にあり」とも記述されている。

さらに他の文献には、「本丸は今平地にて、役所、矢倉などの跡、館所は一町四方あり、あるいはまた、本丸のまわりに長屋の跡あり」などとも記されている。

VI 附 編

(a) 野田山出土の古銭 (図版、34・35、第47・48図)

- | | | |
|----|--------------------------------------|-------|
| 1 | 太平通寶 (北宋〔太平興國元年〕・976年, [初鑄年] 平安時代前半) | 1枚 |
| 2 | 至道元寶 (北宋〔至道年間〕・995~997年, [] 平安時代前半) | 1枚 |
| 3 | 祥符元寶 (北宋〔大中祥符元年〕・1008年, [] 平安時代前半) | 3枚 |
| 4 | 天禧通寶 (北宋〔天禧年間〕・1017~21年, [] 平安時代中頃) | 1枚 |
| 5 | 天聖元寶 (北宋〔天聖元年〕・1023年, [] 平安時代中頃) | 4枚 |
| 6 | 景祐元寶 (北宋〔景祐元年〕・1034年 [] 平安時代中頃) | 1枚 |
| 7 | 元祐通寶 (北宋〔元祐元年〕・1086年 [] 平安時代中頃) | 1枚 |
| 8 | 聖宋元寶 (北宋〔建中靖國元年〕・1101年 [] 平安時代後期) | 1枚 |
| 9 | 洪武通寶 (明〔洪武年間〕・1368~98年 [] 南北朝時代) | 9386枚 |
| 10 | 永樂通寶 (明〔永樂6年〕・1408年 [] 室町時代前半) | 1枚 |

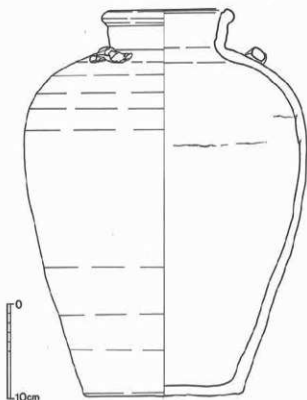


第47図 野田山出土古銭拓影 (実大)

昭和37年黒木町大字北木屋の野田山から古銭を伴って出土した古備前の3耳壺である。野田山は猫尾城が築かれた猫山と同じ丘陵で先端が猫尾城となる。発見場所と猫尾城は直線距離にして0.7kmを測る。

発見者の石崎幸男氏の話では、みかん畑の開墾時に黄楦の樹根の下から出土したらしく、壺は発見した際に破損したとのことであった。壺の蓋は自然石を使用し、現在もこの石は保存されている。古銭は数十個が束になった状態で埋められ、本来は紐を通していたと推察された。

壺を取り上げた時口縁の一部と耳が欠失したらしい。口縁部は玉縁状をなし、頸部は短い。肩部の張りは強く、整美な3個の耳を貼付する。胴部から底部にかけては細まり、径の大きい底を有す。



第48図 野田山出土陶器実測図(1/4)

器表面にはクロロ目が目立ち、内面は粘土紐の巻き上げ底が残る。焼成はかなり堅固で、胎土には小砂粒を多量に含む。色調は茶紫褐色を呈し、肩部に淡緑色の自然釉が掛かる。胴部下半は暗紫褐色を呈する。口径12.2cm、底径15.0cm、器高40.5cmを測る。

(b) 高牟礼城址地形測量(第49図)

高牟礼城は、黒木町大字椿原に所在する猫尾城の支城で、同じ黒木町大字木屋にある立華城と並び称されている。高牟礼城は肥前の龍造寺氏の家臣である多久長門・成富十右衛門が築城し、一方の立華城は木屋弾正左衛門の居城である。

猫尾城の調査の折に高牟礼城に登り現地踏査を実施した。その結果、遺存状態が頗る良く黒木町から地形測量だけでも実施し、町指定へに向けての文化財資料として残したいとの要望があった。しかし、現況では檢が密生し地形測量が実施できる状態になく、地権者との協議の結



第49図 高平礼城址地形測量 (1/600)

果間伐の許可を得たため、猫尾城の第1次調査時に間伐をし、猫尾城調査の最終年度に2日間を費やして地形測量の調査を実施した。

高牟礼城は標高567.2mの高峰山頂に位置し、黒木町は勿論のこと筑後平野、星野村、昭和48年県の史跡に指定された発心城（草野家清の居城）が眺望でき支城としては最適の場所に築いている。

測量調査の結果、城の縄張りは南北150m、東西60m弱で、中央に本丸（標高567m）を置き、南東側約30mには二の丸（標高565.062m）を配する。さらに、北には堀切を挟んで三の丸（標高563.8m）を築いている。郭の配置は本城の猫尾城を基本にして築城しており猫尾城と酷似する。城の東側は堀と土塁が僅かではあるが当時の面影を留めている。さらに、南側の562m付近には僅かな高まりをなす平坦部があり、この場所から筑後平野、猫尾城発心城などが眺望できることから、櫓の存在が考えられる。また、図示していないのが北西斜面には一条の縦堀が掘られている。

版 圖

1



2



図版 1 (1)猫尾城、高牟礼城俯瞰(峯切畑山頂より)

(2)猫尾城と高牟礼城遠景(矢部川より)



1



2

図版 2 (1)本丸西側石垣（南から）

(2)本丸東側石垣（三の丸から）

1



2



図版3 (1)三の丸金景(本丸から)

(2)I区第1、2、13トレンチ(北から)



図版 4

(1) I 区第 1 トレンチ底土状態

(2) 第 20 トレンチ岩盤整形状態



1



2



図版 5 (1)本丸頂部石垣と石段（西から）

(2)本丸頂部の石垣（西から）



1



2

図版 6 (1)第1トレンチ礎石出土状態

(2)本丸I区全景(北から)



1



2

図版 7 (1)本丸Ⅱ区全景(北西から)

(2)本丸Ⅱ区控え石組(北から)



図版 8 (1)本丸Ⅱ区櫓台址(西から)

(2)本丸Ⅱ区石祠跡と石段(西から)

1



図版 9

(1)本丸Ⅱ区と土塁土層断面

(2)本丸Ⅲ区と南北トレンチ（南から）

2





図版10 (1)本丸田区南北トレンチ遺物出土状態

(2)第21トレンチ石組み



図版11 (1)第21トレンチ土層断面

(2)大手門址の礎石



1



2

図版12 (1)第4、7トレンチと櫓台址（東から）

(2)第7トレンチの櫓と土塁の接合部分



図版13 (1)第22トレンチの櫓台の石組(西から)

(2)第5トレンチの土塁の石組(東から)



図版14

(1)第6トレンチの土塁石組（東から）

(2)第8トレンチの土塁石組（東から）





1



2

図版15 (1)第9、10トレンチの土塁石組と礎石(南から)

(2)本丸石垣蹴上がり部分



1



2

図版16 (1)第11トレンチ全景(南から) (2)第12トレンチ掘手門東側土塁(西から)

1



2



図版17 (1)第14トレンチ土塁石組(東から)

(2)第15トレンチ本丸南側石垣(北から)



1



2

図版18 (1)第15トレンチ石垣と盛土状態

(2)第16トレンチ土塁全景(北から)



図版19 (1)第16トレンチ土塁盛土状態

(2)南曲輪部敷石遺構(北から)



1



2

図版20 (1)第19トレンチ曲輪部(東から)

(2)第19トレンチ土層断面

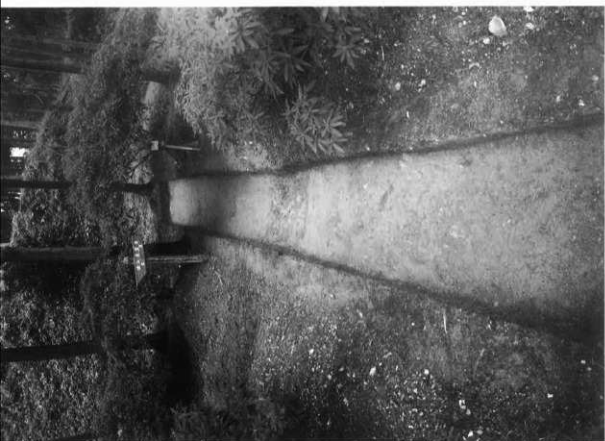


図版21

(1)第29トレンチ土層断面(大手門通路)

(2)第30トレンチ(大手門通路)と礎石投棄状態





図版22 (1)第24トレンチ(堀切)全景(西から)

(2)第25トレンチ(堀切)全景(西から)



1



2

図版23 (1)二の丸I区東西トレンチ土層断面

(2)二の丸第1トレンチ盛土状態



1



2

図版24 (1)二の丸第1トレンチ土層断面

(2)二の丸I区全景(西から)



1



2

図版25 (1)二の丸Ⅰ区全景(東から)

(2)二の丸槽址礎石(根石)出土状態



図版26 (1)縦堀・土塁全景（北から）

(2)縦堀・土塁土層断面

1



2



図版27 (1)井戸址調査区全景(南西から)

(2)井戸址(南から)



1 T-2



1 T-3



1 T-4



1 T-5



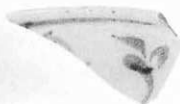
1 T-6



1 T-8



1 T-9



1 T-15



1 T-19



1 T-19



1 T-25

図版28 本丸第1トレンチ出土遺物



1 T-27



12 T-7



10 T-4



12 T-7



10 T-4



12 T-26



16 T-27



11 T-5



16 T-10



11 T-5



19 T-14



20 T-16



20 T-17



28 T-22



28 T-22



30 T-23



30 T-24



大手門-25



大手門-25



II-1



II-2



II



III-1



III-10



III-2



III-13



III-3



III-14



III-4



III-15



III-5



III-23



III-8



III-9

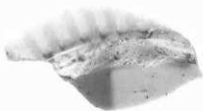


III-24

図版31 本丸田区南北トレンチ出土遺物



III-27



III-33



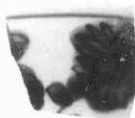
III-30



III-34



III-32



III-34



III-32



III-36



III-33



III-38

図版32 本丸田区南北トレンチ出土遺物



Ⅲ-39



Ⅲ-39



Ⅲ-42



Ⅲ-43~45



二の丸-1



二の丸-2



二の丸-3



二の丸-4



二の丸-7

図版33 本丸田区南北トレンチ、二の丸出土遺物



二の丸-8



野田山



二の丸-8



二の丸-9



野田山



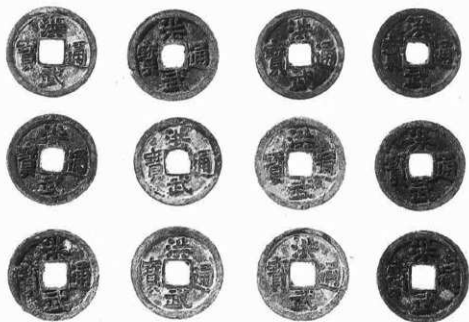
二の丸-9



二の丸-10



野田山



1



2

3

4

5

6



7

8

9

10

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|---------|
| 1 洪武通寶 | 2 天禧通寶 | 3 天聖元寶 | 4 祥符元寶 | 5 太平通寶 |
| 6 永樂通寶 | 7 元祐通寶 | 8 聖宋元寶 | 9 景祐元寶 | 10 至道元寶 |

猫 尾 城 址

黒木町文化財調査報告第1集

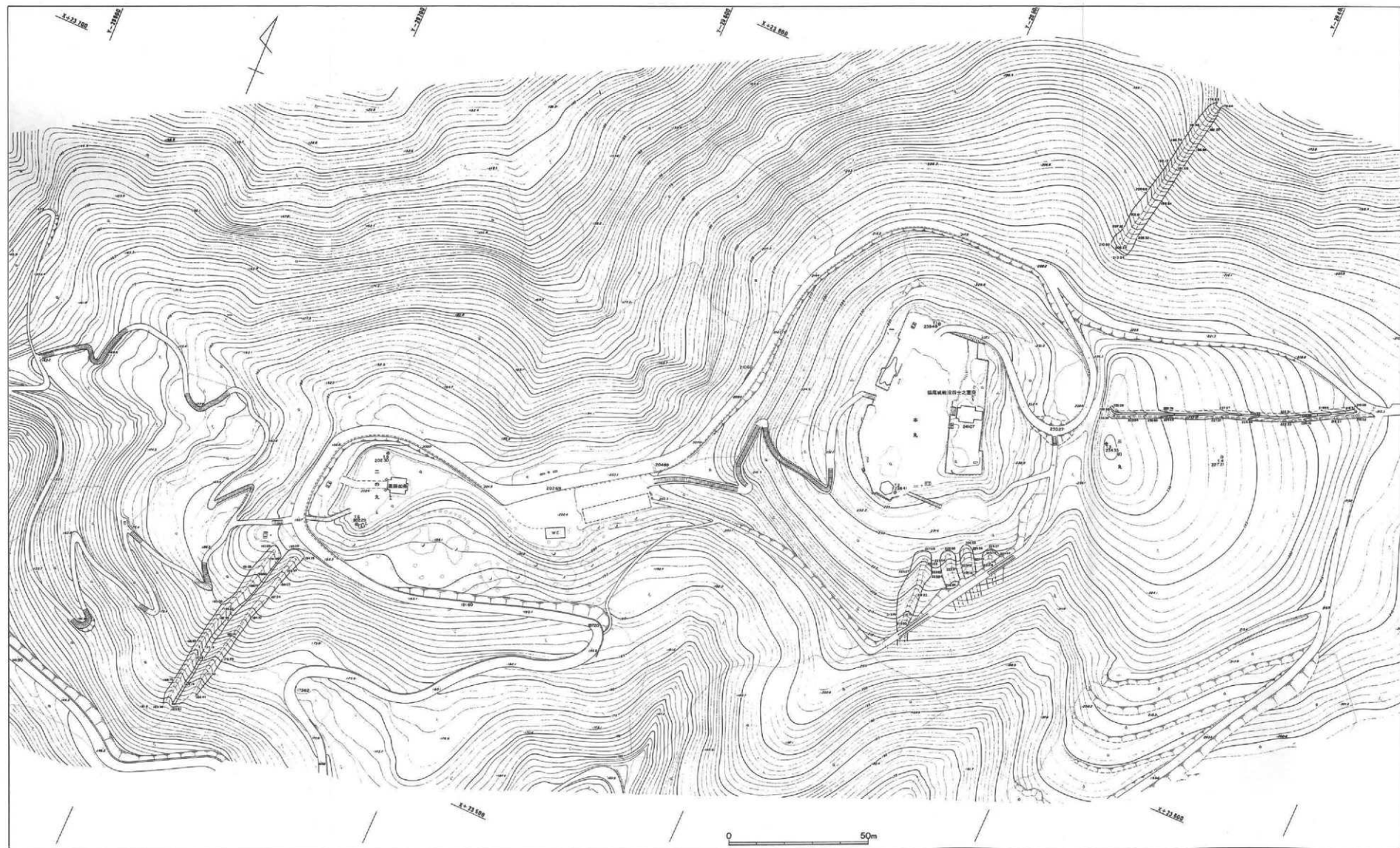
平成3年3月30日

発行 黒木町教育委員会

福岡県八女郡黒木町大字桑原207

印刷 川辺印刷有限会社

福岡市南区高宮1丁目7-19



付 图 1 德尾城航空测量图 (1/1000)